
永遠に.....

Ruka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠に……

【Nコード】

N5380U

【作者名】

Ruka

【あらすじ】

「もう私たちは元の姿に戻れないわ」
そうコナンに告げた灰原。それから二人のまわりの雰囲気は険悪なものになっていく……。
CPはコ哀です。

No.1 永遠に

「工藤君……」

「おう灰原。どうした？」

コナンは今日、帝丹小学校から帰るとき、哀に「話がある」と言われ、帰宅してから蘭にあてていつものとおり「博士ん家でゲームしてくるね」と置手紙を残し、探偵事務所をぬけ出てきた。なんだけ哀のようすがいつもと違ったので急いで阿笠邸に来たが、彼女はなかなか話を切り出そうとしない。

「なんだよ、話って」

なんだか哀の様子がおかしい。そう思ってコナンは首をかしげた。

「解毒剤、もう作れなくなっただわ。永遠に」

「え？」

彼女の突然の告白。コナンは頭の中が真っ白になった。

「な、んで」

「……FBIが鳥取にある組織の本部を壊滅させたらしいわ。……」

「ただ、組織のボス。あの方は、A P T X 4 8 6 9 のデータが流出することを防ぐために本部ビルを爆破・データを持ったまま自殺……。本部ビルの場所は鳥取の中心部で、多くの死者が出たらしいわ……。今、ニュースで報道されてるでしょ？ 幸い、F B I が態勢を強化していて、暗殺を繰り返していた黒の組織の本部だつてことは世間には知られていないけど……。それで。」

「その爆破の衝撃で薬のデータは全て消失。組織の上部の人間や高い能力を持った学者などは全員本部ビルにいたため爆破に巻き込まれ、死亡。つまり、あの薬のデータは完全にこの世から消え去つた。」

「だからもう俺らは元の体には戻れない……。っつーことか？」

「コナンが途中で口をはさみ、哀より先に真相を告げる。」

「……ええ。本当にごめんなさ。」

「いいんだ。」

「コナンが哀の謝罪を止めた。それでも何か言おうとする彼女に、もう一度きっぱりと告げる。」

「いいんだ、別に。元の体に戻れないのは、お前のせいじゃねーし。いつまでもぐだぐだ言ってるなんて嫌だろ？」

「でも。」

「お前や俺がいくら強く願っても、それは叶わないだろ。」

「急に、コナンの声質が変わる。」

「……江戸川、君？」

「いくらおめえが謝ったって、もう永遠に工藤新一には戻れねえんだ！ー！」

コナンの激昂に、哀はびくつと震えた。

「う、ごめ……なれ」

「もういいよ」

コナンはそう言い捨てると、ドアを閉め阿笠邸を出て行った。

残された哀は壁に寄りかかり、ずるずると床にへたりこんだ。

その様子を、影から博士が見ていた。

・
・
・

「コナン君と灰原さん、最近全然話してないですよね……」

あの件から一週間が経ち、全く話さなくなったコナンと哀を心配して、少年探偵団の歩美、光彦、元太の三人は放課後、教室で作戦会議をしていた。

「うん……ケンカでもしたのかなあ？」

「あ。もしかして、この前コナンが灰原の給食のプリン食ったから

怒ってんじゃないかねえのか？」

光彦と歩美はしばし沈黙した。

「……元太君、二人はそんなに子供じゃありませんよ」

「そうだよ。それに、哀ちゃんがプリンいらないうって言ってたからコナン君がもらったんだもん！！」

哀は「プリンとか、甘いもの食べると太るからいらないうわ」と言っていた。実際、彼女は全然太ってないのだから、甘いものもちよつとは食べればいいのに、と歩美は思う。

「わ、悪イ。でもよお、あの二人がケンカって、よっぽどのがあつたんだろうな」

元太の意見に二人もうなずく。

「そうですね……。でも、今回はコナン君が一方的に怒ってる感じですけど……」

「あ、歩美が哀ちゃんに『なんでコナン君とケンカしたの？』って訊いたら、哀ちゃんすごく難しいこと言ってたよ」

「え、灰原さん、なんて言ってたんですか？」

「えーつとねえ、確か『残念だけど、それはいくら吉田さんでも教えられないわ……。唯一言えるのは、私は彼に一生を費やして償っても許されない、大きな罪を犯した、ってところかしらね……。』って。『ゆいいつ』とか『ついやって』とか『つぐなっても』とか、

「どういう意味だろうね？」

元太が、すごく深刻そうな、難しい顔をした。

「……よくわかんねえな」

「灰原さん……ミステリアスですね……」

「……あ、わかった！ 灰原のヤツ、この前コナンの海藻サラダ取って食ってた！！ あれはコナン絶対怒ってたぜ。灰原がムリヤリとってった感じだったし」

二人はしばらくの間無言だったが、やがて歩美が口を開いた。

「……元太君、どうしても食べ物のことから頭が離れないんだね」

No.1 永遠に(後書き)

はじめまして Rukaです。

初投稿です。ここまで読んでくださった心の広いお方、どうもありがとうございます。

えー、文章書く能力ないので超意味不明だと思います。……すみません。

これからも投稿していくので、できれば見捨てずに見守ってください。

No.2 帝丹高校

九年後。

少年探偵団は高校生になっていた。コナンと哀はあれからずっと微妙な関係のまま過ごしてきた。

光彦は私立の名門校に合格した。ここからそんなに遠くはないが、学校が違つとなると五人で会える時間はかなり少なくなる。

他の四人はみんな同じ帝丹高校に通うことになった。今日は帝丹高校の入学式だった。

「うわー、すっごく緊張するね」

吉田歩美は高校生になつても前と変わらず明るく活発で素直な性格の子で、男子からもかなりの注目をあびていた（いままもコナン一途）。

「確かに、こんなにたくさんの人が入学するんだなつて思うと、緊張するぜ。まあ、これからもいろいろよろしくな！ 歩美、灰原！」

小嶋元太は相変わらず太つてはいるが、中学生のときにラグビー部だったため、がっちりとした体型になっていた（いまだ歩美に片想い中）。

「ええ、よろしく、二人とも」

灰原哀。どこか冷めた態度に落ち着いた雰囲気、ウェーブがかつた明るい茶色の髪。その容姿の美しさに早速周囲の注目を集めている。

「ところで、コナン君は？」

「ああ、彼ならさつき放送で職員室に呼ばれてたわよ。多分、新入生代表の挨拶でもするんじゃない？」

「まじかよ、すげーな！」

歩美はいつも、なぜ哀は口を利かなくてもこんなにコナンのことがわかるのだろう、と不思議に思う。

「哀ちゃんって、ホントすごいよね」

「？ なにか？」

元太は、いつの間にか新しい友達と一緒に体育館の入り口の方で楽しそうにしゃべっていた（移動早っ！！ 瞬間移動！？）。

歩美はくすりと笑った。

「私、いまでもコナン君の考えてること一番理解してるのは哀ちゃんだと思ってるから！」

「そう？ ありがとう」

哀がふんわりと笑って軽く受け流す。

歩美の第六感によると、この親友の想い人はコナンのはずなのだが、出会ってから九年経っても全くそんな態度を見せない。

コナンのことは好きだが、哀のことはもっと好きなので、歩美はこの二人の恋を応援することにした。

「哀ちゃんとコナン君、お似合いだからね！」

『新生、入場』

突然アナウンスが入り、体育館の扉が開けられる。新生たちは一気に気を引き締めた。

「ねえ、哀ちゃん。コナン君まだきてないよね？」

歩美が小声で尋ねる。

「そうね。でも、彼のあの俊足なら余裕で間に合うと思うわよ」

新生たちが次々に体育館へ入っていく。残りの生徒が半分をきつたとき。

「歩美、歩美！」

後方で歩美の名を呼ぶ声が聞こえ、彼女が振り向くと、そこにはコナンが立っていた。

「コナン君！」

コナンの登場に、歩美が声を上げる。

「確か俺と歩美、同じクラスだろ？ 六組……だっけ？」

「うん、そうなの。哀ちゃんも同じクラスだよ！ 元太君だけ違うのがちよつと残念だけど……」

歩美がしんみりと言う。

「元太は？」

「むじゅ」

コナンの問いに、哀が答える。こんな風にして、コナンの疑問に対し哀がさりげなく答える、という光景は小学三年生のときくらいからよく見る。コナンは哀の問いに返答しないのだが。

「へえ、あいつもう友だちつくってんのか」

「ていうか、コナン君くるの遅い！！ いま、五組の名簿二十九番の人が入場したところだよ！」

「え、まじ？ あつぶねえ。俺名簿七番だから、俺の番まであと十八人か」

「ぎりぎりセーフだね」

こうして二人が仲良く話しているのを見るのは中学でもよくあった。しかし、二人が話すたびに歩美のところに「コナン君と付き合ってるの？」という質問が大量にくる。歩美はそのたびに否定するのが大変そうだった。

高校でもどこでも、やはり美男美女が話していると目立つらしく、周りの人がちらちらこちらを見て「あの人たち付き合ってるのかな」「とこそこそ話していた。

「ほら、コナン君そろそろ体育館入り口の方行つといた方がいいんじゃない？ いま、五組の四十番、渡辺君が入場したところだよ」

「おう、そうだな。じゃ！」

コナンが去ると、歩美はくるりと勢いよく哀の方を振り向いた。

「哀ちゃん、もしかして私とコナン君が話してて、嫉妬してる？」

歩美は口許に手をあてて、にまっと笑った。

「別に、してないわ」

嘘だ。咄嗟に返せた自分が凄いと思う。確かにいま、歩美に嫉妬していた。

「えー、ホントに？ ま、いいや。それより哀ちゃん、今度から呼び捨てで呼んでもいい？」

「ええ、いいわよ……。 え？」

実は生返事（コナンのことを考えていて）をしていた哀は、話の内容をよくよく考えてみて、「え？」と疑問に思った。

「だ・か・ら！ 今度から『哀ちゃん』じゃなくて『哀』って呼ん

「でいい？」

「ええ……？」

「だめ？」

「……………別に、いいわよ」

私はこの顔に弱い、と哀は思った。

「ホント？ やったあ！ じゃあ哀も今度から私のこと『歩美』って呼んでね」

「……………。ええ、わかったわ」

「じゃあ、これからもよろしくね、哀」

「よろしく」

「あーっ！ 哀、もう哀の番だよ！ いま二十五番の野村さんが出て行ったところ！ 哀、二十七番でしょ？」

歩美の言つとおり、もう哀の番だった。

「そうね。じゃ、行ってくるわ」

「いってらっしゃい。バイバイ」

彼女は入り口へ向かい、扉をくぐった。体育館の壁際には、紅白幕が付けられている。ざっと辺りを見まわすと、全校生徒は千二百

人程、所々に服装や髪の色が派手な生徒がいるが、他の学校に比べれば風紀のいきとどいているところだということがわかった。

（ 結構素敵な学校ね ）

体育館の通路を進み、新入生たちの座っているところにたどり着く。哀は自分の座席を見つけると、さっと腰を下ろした。

しばらくして、歩美や七組の元太などが到着し、入学式が始まった。

No.2 帝丹高校(後書き)

どもこんにちは！ Rukaです。
永遠に……の投稿今回で2回目です！
また意味不明な文章です……。
次回もよろしく願います。

(退屈だわ……)

哀は欠伸を噛み殺して辺りを見まわした。自分と同じく、コナンや元太も眠そうにしている。

(あの推理オタクさんは昨日の夜、また飽きもせず血生臭いミステリー小説を読んでいたのかしら？)

そんなことを思いながら歩美に目をやると、彼女も必死で睡魔と闘っていた。

長つたるい校長の式辞(しかも超つつかえてた)が十五分位してようやく終わり、司会の教頭が次のプログラムを告げる。

『 新入生代表の挨拶、江戸川コナン 』

マイクでコナンの名前が呼ばれる。コナン、という名に、ほとんどの新入生が唖然とし、次いでわき上がってくる笑いを必死に堪える。後ろにいる二、三年生の方からはいくつか笑声が聞こえた。哀も、初めてこの名前を聞いたときは、もっとマシな名前が思いつかなかったのかと呆れた果てたものだ。

しかしその笑い声も、コナンが壇上に上がると、途絶えた。みな、

彼の顔を見ると「かつこいい!」「うわ、超イケメン」などと小声で囁き始めた。コナンは最近、学校で眼鏡をはずしている。その聡明な瞳と、ルックスのよさ、さらに成績優秀・運動神経も抜群にいいとなると、周りの女子は放っておかないだろう。すでに女子たちは式の途中だということも忘れてきやあきやあ近くの友だちと話し始めている。

だが、ここまでコナンが完璧だとすると、今度は男子からの妬みが酷くなるように思う。もうすでに男子の中ではコナンのことを睨みつけている人間もいる。だが、そんな人間もコナンと話せばたちまち彼への妬みは消えるだろう。コナンは新一だったときと違って、控えめな行動・言動をとるようにしていた。そんな人柄のよさも、コナンに人気がある要因の一つであった。

『静粛に』

教頭が騒いでいる人を注意すると、周りは再び静かになり、この空間に緊張感が舞い戻ってきた。そして、コナンの式辞が始まる。

「答辞。この春のよき日に、帝丹高校に入学できたことを、私たちは嬉しく思います」

コナンの声は聞いている人を心地よい気分させる（歌っているとき以外）。哀は、コナンの声が好きだった（歌っているとき以外）。

コナンは先ほどの校長の話よりも遥かに聞き取りやすく、全くつかえずに話していく。

「これから、部活に勉強によりいっそう励み、よりよい高校生

活を送っていきたいと想います」

コナンの挨拶がもう少しで終わる、というときに、今度は保護者席から歓声があがった。生徒たちも何事か、と後ろを振り向く。

「ねえ、あれ藤峰有希子じゃない？」

哀の近くの新入生がしゃべった。

「だれ？ その人」

「私も詳しくは、知らないんだけどお母さんが大ファンで。確か、三十年くらい前に女優として一世を風靡し、二十歳であの世界的に有名な推理小説家・工藤優作と電撃結婚、そして引退。それから、アメリカでたまに闇の男爵ナイトバロンの妻、闇の男爵夫人ナイトバロネスとしてテレビにでてらしいよ。それと、確か息子がいて。知ってる？ 工藤新一っていう人」

「あ、聞いたことあるよ。私、小さかったからあんまり覚えてないけど、確か高校生探偵として有名で、難事件を次々解決。でも、行方不明になって、しばらくしてから両親が死亡通知を出したって……」

「そうそう。でも、何でここにいるのかな？ もしかして、このなかに工藤新一以外の子供がいたりして？」

「わー、同じクラスだったらどうしよう？」

そんな会話を聞きながら哀が壇上を見ると、コナンが思いつきり顔を引きつらせていた。「なんでここにいんの？」という顔だ。幸

い、皆保護者席に注目していて、コナンのその顔を見ているのは哀だけのようだ。

『静かに』

教頭にまた注意されると、みんながいっせいに前を向く。みんなが姿勢を正したところで、コナンは言葉を続けた。

No.3 入学式（後書き）

今回は入学式編です。

ふふふ……コナンはもてますな

次回もよろしくお願いします。

「はあ、やっと終わったね」

歩美が伸びをしながら哀に言う。

式は無事に(?)終了し、コナンたちはいつもの四人のメンバーで歩いていった。

「そうね」

「ていうか、何で俺だけ別のクラスなんだよ!？」

元太が不服そうに言う。それをコナンが慰める。

「そんなに怒ってんじゃねえよ、元太。この学校は一年ごとにクラス替えだし。来年、一緒になれるかもしれねえだろ？」

「でもよお」

元太が不満を言おうとした、そのとき。

「きゃー!! 亜実、あれ、コナン君よ!!!」

「え、うそ!!」

「逃げよう！ 私、今髪型最悪なの！！」

「私も今日化粧してきてない〜！」

四人の傍にいた見知らぬ二人は、叫びながらトイレにかけこんでいった。

「……………」

「名探偵さんはもうすでに有名人らしいわね」

哀が皮肉を込めて言う。

「……………有名人と言えばよ、式の途中、なんかすっげえ有名人がきたらしいぜ？」

「あ、歩美その人見たよ！ すっごく美人さんだった！ なんか、どこかで見たことあるような顔だったけど……………」

「見たことある顔？」

元太が不思議そうに言う　と。

「コナンちゃん」

「わっ！？」

突然、コナンの背後にだれかが抱きついてきた。

「ひっそりぶり〜」

「母さんっ!」

コナンに抱きついてきたのは工藤有希子だった。

「あー、思い出した!!! この人、仮面ライダーの映画の試写会のときにいた人だよ、元太君!」

「え? あー、あのとときのコナンの母ちゃん!」

「いや、母さんじゃなくて親戚のオバサ……お姉さんだよ」

コナンが「オバサン」と言おうとして慌てて言いなおす。

「でも、コナン君さっき『母さん』って言ってたよ?」

コナンがぎくつとする。そういえばさっき「母さん」と呼んでしまったかもしれない。

(やっべえ……つい癖で……)

「えっと……それは……」

「養子になったのよ、彼は」

え、とコナンが振り返ると、涼しい顔をした哀が口を開いていた。哀が有希子に目で合図を送る。

「そ、そうなのよ! ホラ、私息子が死んじゃったじゃない? そ

れで、コナンちゃんもこの間両親が亡くなったっていつから……、
養子として引き取ることにしたのよ」

「そうなの？ コナン君」

歩美が不安そうに聞く。

「え、ああ……。実はそうなんだ」

「そっか……。大変だったんだね、コナン君」

「え、じゃあコナンはこの人と一緒に外国にいつちまうのかよ!？」

そつえばそうだと気づいたときにはもうすでに遅かった。歩
美は目につつすらと涙をためていた。

「……っ、せつかくコナン君と同じ高校に入学できたのに……離れ
離れになっちゃったの?」

ぼろ、と歩美の目から涙が落ちる。

「ちょっと新ちゃん、どうにかしなさいよ!」

有希子が小声でコナンを叱責する。

「どうにかって言われても……」

コナンと有希子が互いに困惑していると、哀が口を開いた。

「彼は、外国へ行かないわよ」

「え？ ホント？ ……哀」

「ええ」

歩美が目には涙をいっぱいにとって哀を見る。哀はさらに言葉を続けた。

「戸籍上は親子になったけれど、彼もせっかく日本の高校に受かったんだし、これから新たに他の国の高校を受験しなおすなんて、そんなことしないわ」

「よかったあゝ。コナン君がいなくなっちゃったらどうしようかと思っただよ」

歩美はほっと胸をなでおろした。

「でもよ、何で灰原がコナンの家のこと、そんなに詳しく知ってた？」

「え？」

コナンと哀は口を利いていない。それなのに、なぜ哀がこんなに詳しくコナンの家の事情を知っているのかと元太は疑問に思った。元太の問いに哀はぐっぐつまる。

「えっと……それは……」

「博士からきいたんだろ」

突然のコナンの助け舟に、一同啞然とする。これまで、哀がコナンをさりげなく助けることはあったが、コナンが哀を助けることはなかった。

「うちの母親、博士と仲いいからさ。多分、博士に養子のことかいろいろ教えたんだろ。んで、こいつは博士からきいた、っていうことさ」

さつきまで不審に思っていた元太も、いまのコナンの答えを聞いて納得したようだった。

「へー。そうだったんか」

有希子がちらりとコナンを見る。その顔はにやけていた。

「し・ん・ちゃん」

有希子はコナンに近づいて耳元で囁いた。

「うわっ……なんだよ、母さんか。びっくりした」

「なんだよとは失礼ね」

有希子がムツとする。

「ところで新ちゃん」

「あ?」

「もう、ラブラブじゃない! いいわよ。母さん、哀ちゃ

んならお嫁にもらっても」

「はあ？」

イキナリ何を言いだすのだ、この親は。

「お二人さん、挙式はいつ？ もうデートして、手を繋いで、キスも当然したのよね？ あ、もしかしてその先まで進んでたりする？ 母さんは別にいいけど、哀ちゃんに迷惑かけちゃダメよ！ 学生のうちにできちゃった結婚なんて……。まあ確かに、早く孫の顔が見たいっていう想いはあるけどさ」

「か、母さんちょい待」

「あ、もしかして哀ちゃん、もう妊娠してたりする？ あ、だから哀ちゃんあんなに不機嫌そうな顔してるんだ。もしかして、コナンちゃん、嫌がる哀ちゃんをムリヤリ……。！？ いやー！！ ヘンタイ！！！！ 母さん、そんな子に育てた覚えはないわよ！ まあでも、コナンちゃんも哀ちゃんも頑張ったわね！ でも、親になるには相応の覚悟が」

「だーもう！ 母さんストップ！ その妄想劇場を止める！ まず第一に俺とアイツは付き合ってたなんかいねえから！ だからデートもキスもそれ以上のこともしてないし、灰原は妊娠してないから！ 機嫌悪そうなのはいつものことだし！ それに、俺とアイツはここ九年くらい、ずっと口利いてねえし」

「え？」

有希子は愕然とする。

「嘘よ！」

「嘘じゃねえ！」

「絶対嘘よ！ だって、哀ちゃん前と変わらず新ちゃんのこと見てるし、さっきだってあんなにお互いのこと助け合ってたじゃない！ あんなにお互いのことわかり合ってるのに、新ちゃんは何で自分の気持ちを認めないの？ 哀ちゃんは、あなたに無視されても、酷い言葉かけられても、ずっといままで我慢して耐えて、新ちゃんのこと想ってきたのに……」

「……………」

コナンは呆然とした。あの母が、ここまで言うなんて。

「私、もう帰るけど、ちゃんと哀ちゃんの気持ちを考えて答えださなさいよ。じゃあね」

そういうと、有希子はショートヘアの鬘をつけ、学校を去る保護者たちにまじって外へでて行った。

No.4 養子(後書き)

こんにちは、Rukaです！

今回で永遠に……の投稿4回目となりました！

個人的には有希子さんのキャラが大好きです。

なので、今回一番気に入っているところも有希子さんのところ
です。

次回もよろしくお願いします。

「みなさん、おはようございます。私がこのクラスの担任の久住優果^{くすみゆ}です。まだ教師になって三年目なので失敗も多いとおもいますが、みなさんよろしくおねがいますね」

コナンたち六組の担任になったのは、二十五、六歳くらいのまだ若い女性教師だった。顔立ちも結構綺麗で、男子のほとんどが見惚れている。

「では、みんなのことをよく知りたいので、自己紹介してってください。じゃあ、名簿順で。一番の浅井さんから……」

優果が声をかけ、一番、二番、三番　と、みんなスムーズに自己紹介をしていった。

が、七番の人になると。

「帝丹中学校から来た江戸川コナンです。特技はサッカー、趣味は推理小説を読むこと。みんなよろしく」

たったこれだけの、ごく普通の挨拶。だが。

「きゃー、コナン君かっこいい！」

「おい、あれ新入生代表の挨拶してたやつじゃねえか？」

「同じクラスだったんか……」

「こっちむいて〜」

「やべえ、超有名人じゃん。俺あいつと同じクラスなのかよ」

などなど、多様な意見が一瞬のうちに飛び交う。先生もその人気ぶりにしばらく呆然としていたが、やがて我に返ると生徒たちを注意した。

「はいはい、みんな江戸川君がかっこいいのはわかるけど、もうちょよっと落ち着いてくださいね」

優果がそういい、再び自己紹介が再開する。たまにかわいい女子（哀よりは劣る）がいたり、かっこいい男子（コナンよりは劣る）がいたりすると、みんな歓声を上げていた。

「じゃあ、次。二十七番の灰原さん」

「はい」

哀が席を立つと、皆がその美貌に絶句した。

「帝丹中からきた灰原哀です。得意分野は化学。よろしくお願いします」

哀はごくごく普通の自己紹介をしたつもりだった。それなのに。

「うわっ、やっぱ。超美人」

「足細〜！ きれ〜！」

「灰原さ〜ん！ こっちむいてよ〜」

さっきまでの人たちとは比べものにならないくらいの歓声があがった。コナンのときと比べてもひげをとらない。

(……化学好きな人が多いのかしら?)

哀はちよつと間違った解釈をして、席についた。

それからは、予想していたとおり歩美のところまで歓声が上がリ、自己紹介と学習目標決めをして一時間目は終了した。

「ねえねえ、灰原さんてハーフなの？」

休み時間になり、哀の机の周りには男女問わず人ばかりができていた。哀がコナンや歩美のほうを見ると。彼らのまわりもすごい人数の人がいた。

「ええ」

「すごい！ どうとどくの？」

「イギリスと日本」

「へ〜、かつこいいね!」

(めんどくさ……)

ハーフだから、何だというのだ。別にどうでもいいだろう。アメリカにいたときはこのアジア系の顔立ちでいじめられ、中学のときは「お前その髪染めてんだろ?」とか先輩にイチャモンつけられた。哀の今までの人生の不幸の原因は「ハーフであること」というものが大半を占めていた。ジンも異様なほどこの髪に執着していた。

でも、ハーフでいていいこともあった。自分では覚えていないが、小さい頃母に「志保エレナのその髪の色はお母さん譲りね」と言われて志保はとても喜んでいたら姉あけみが言っていた。

それと。

(……小学生の頃、あの名探偵さんに「オメーの髪、綺麗な色だね」って言われたことが一番嬉しい……)

そのときのことを思い出して、哀は顔を少し赤らめて自分の髪を触った。

・
・
・

あれは確か、小学一年生の夏頃。

私たち少年探偵団の五人のメンバーと博士で群馬のキャンプ場にいった。

昼間カレーを作ったり、トランプをしたり、虫捕りをしたりして遊んで疲れた普通の子供の三人（歩美、光彦、元太）は夜になるとぐっすり寝てしまった。

普段は0時をこえないと眠らない私は、当然夜九時などに眠れるはずもなく、ふらふらとテントを出た。

（あの子たちはともかく、工藤君や博士はよくこんな早い時間に寝れるわね……）

あの二人も自分と同じく夜型だと思っていた哀は、ちょっとがっかりした（あとで博士に聞いたら「わしは寝ようと思えば昼間でも寝れるんじゃ」とか言っていた）

テントの周りをふらふらと歩いていると、ちょうどいいところにベンチを見つけて、私はそこに腰を下ろした。空を見上げれば、キラキラと輝くものが無数にあった。

「星……。綺麗……」

上を向いてデネブ、ベガ、アルタイル……などと知っている星を探していく。

「あれ……。アンタレスは……？」

哀は首をめぐらしてアンタレスを探したが、なかなか見つからない。組織にいるとき、窓際からあの赤い星を見ると、自分と一緒に色だと安心できた。

(……そういえば、星を探すすべは組織で習わなかったわね……)

組織で必要な知識といえは、薬品の研究・開発をするのに大切な知識。同じ理科でも星などの観察をする科学は、あまり教えてもらわなかった。

(光り輝く星は、闇の黒に染まった私なんかには似合わないわ……)

コナン^{あのひと}もそう。漆黒に染まった私を、彼が暗い長い道を明るく照らして、輝く白銀の道へと導いてくれる。

「アンタレスはあっちだろ？」

不意に、後から声が聞こえて私はハッと振り返った。

「江戸川、君……」

振り向くと後ろには工藤君がいた。

「まったく……びっくりさせないでよ。寝たんじゃなかったの？」

「おう、寝たフリしてた」

「寝たフリ？ なんでまた」

「お前が、どっかに行くと思ったから」

「……え？」

私は、その言葉を言ったときの江戸川君の横顔が本気で悲しそうだったので、思わず聞き返した。

「お前が、あのバスジャックのときみたいに、またなんかやらかしそうだったから……」

「工藤君……」

その表情を見て、私は心に決めた。

「大丈夫よ。もうあのときみたいに逃げたりしないわ。だって、私がいなくなったら、誰があなたの解毒剤をつくるの？ 解毒剤をつくるのは、私にしかできないわ。だから、安心して。それが、私にできる唯一のあなたへの償いだから。あなたのことを放つてどこかへ消えたりしないわよ。大丈夫……」

自分の決めたことを口に出して、もう一度強く心に刻み込んだ。

No.5

灰原哀の記憶（後書き）

どーも、Rukaです

今回はちよつとコ哀風味出してみました

えつと、今回星の名前が出てきましたが、私自身は全く星に詳しくありません。アンタレスとかも、結構適当です。哀が見つけれなかった星をアンタレスにしたのに、深い意味は全くないです。

次回もよろしく願います。

No.6 素直になんて

「……原さん、灰原さん!!」

「え?」

小学生の思い出にひたっていた哀は、クラスメイトの女子の声で現実に引き戻された。

「『え?』じゃないよ、もう! なんか急に黙りこくっちゃって。心配したんだから!」

「あ、ごめんなさいね」

気づくと、もう哀の周りにはその子しかいなかった。哀がぼけっ
としている間にみんな他の友だちのところへいったらしい。

「あ、私ちよっとトイレ行ってくるね……」

最後まで哀の机の傍にいたその子も、トイレに行くという口実を
つくり、哀の元から離れていった。

・
・
・

「……サンキユ」

何に對してのお礼なのかは、いまとなつてはわからない。ただ、そのときの私は、解毒剤をつくることに對するお礼だと思つた。

「……私のほうこそ、ありがとう。おかげでアンタレスの場所がわかつたわ」

「おう。おめー、意外と星の知識は乏しいんだな。アンタレスって、あつちの方にあんだぜ？」

「……組織では天体観測のことはあまり習わなかつたのよ」

江戸川君がしまつた、という顔をした。きつと、私に組織いたときのつらい記憶を思い出させてしまつたと後悔しているのだろう。

「……いいのよ。別に、今の私にも昔の私にも星の知識は必要ないわ。私、星とは無縁の関係だし。あなたと違つてね」

「……そうか？ 俺は、お前と星、似てると思つけどな」

「え？」

そういつとコナンは考え込むように顎に手をあてた。

「そうだな……たとえば……。髪、とか？」

「髪？」

私は、彼が言つたその単語を繰り返した。

「そ、髪。お前の髪と星、どっちも綺麗じゃん。その髪、すっげー光反射して輝いてる。星も。だから、似てる」

そんな褒め言葉を言われたのは、生まれて初めてで。

ジンが執着したこの髪。何度恨んだか知れないけど。でも、このときだけは。

このときだけは、この髪の色でよかったと、生まれて初めて思った。

・
・
・

(……こんな昔話、思い出しても仕方ないわ)

哀はいままで何度もこの記憶を忘れようとした。思い出せば思い出すほど、コナンへの想いが強くなって苦しくなる。でも、忘れられない。

「へ、コナン君、推理小説好きなんだ！」

コナンの方から楽しそうな笑い声と、さっきまで哀のところにいる女子生徒の声が聞こえた。彼女もやはりまったくしゃべらない哀に退屈していたのだろう。トイレから戻った後は、みんなが寄っているコナンの机のところに行ったらしかった。

「ああ。得に好きなのはシャーロック・ホームズの『四つの署名』」

だな」

「あ、それ俺の親父も持つてるぜ！一回読んでみたけど、おもしろーよな！」

机のところではーっとしながら聞いていた哀は、コナンの机の近くにいた男子生徒の放った言葉「おもしろー」に驚愕した。コナン以外にも、ホームズ好きの人間がいるのか。

「ああ、いいよな！ ていうかお前も推理小説読むんだな、平野。馬鹿っぽい顔してるから推理小説はおるか、本も読めないかと思っ
た」

「なんだと？」

あははは、とコナンの席の周りで笑いが起きる。それを見て、ク
ラスの人物は、また一人、また一人、とコナンの方へ引き寄せられ
ていく。

歩美の周りにいた生徒たちも、コナンとられたようで、歩美がぶ
すくれた顔をしながら哀の方へ寄ってきた。

「もう、コナン君、歩美の友だちみーんなとっちやうんだから！
ホント、空気読んでほしいよね」

「まったくね」

「コナン君、人気だね。優しくてかつこよくて頼りがいがあった。
女子の友だちもいっぱいできてるね」

実は哀もそこが一番気になっていた。精神年齢が十歳も下の少女達に彼が傾くとは思えなかったが、自分たちは刻々と元の体の年齢に近づいている。もしかしたら、彼が年下の女の子を好きになってしまうかもしれない。

「私、哀が不安になる気持ち、わかるよ」

歩美の言葉に、哀はコナンの方に向いていた顔を歩美の方へ向けた。歩美が天使のように笑う。哀はこの笑顔に弱いのだ。

「哀、自分に素直にならなきゃだめだよ！ コナン君、かつこいいし、頭いいし、運動神経いいし、性格いいしで、倍率高いんだから！ もっとアピールしないと、コナン君一生哀の気持ちに気づかないよー」

そういうと、歩美もコナンのところへ向かっていった。

「……素直になんて、なれないわよ」

哀のその呟きは、誰にも聞かれることはなかった。

No.6 素直になんて(後書き)

こんにちは！ Rukaです。

えー、ジンがシェリーの髪に執着してたとかいうのは、私の勝手な妄想です。

コナンと哀、仲直りできるといいですね！

次回もよろしくお願いします。

No.7 歩美の告白

「ねえコナン君、ちょっといいかな？」

歩美は、コナンの机のところに行くといきなりそう言った。

「ああ、いいぜ」

急に言い出したにも関わらず、コナンは歩美がそう言うことを予測していたかのように平然と答えた。もうすでに授業の始まりの時間を告げるチャイムが鳴りそうだ。

二人して連れ立って教室を出て行き、コナンの机の周りに集っていた生徒たちはざわざわと騒ぎ始めた。

「おい、あの二人付き合ってたのか？」

「え、コナン君、狙ってたのにー!!」

「俺らのアイドル、歩美ちゃんかー!!」

みんなして騒いでいると、優果が教室に入ってきて授業の時間になったので、みんな席に着いた。

「あら？ 吉田さんと江戸川君は？」

「さぼりです。二人でラブラブしてまーす」

一人の男子生徒がそういうと、どっと一部生徒たちから笑いが起こった。しかし、半数の生徒たちは歩美とコナンのことが気になり、少々暗い顔をしている。

「そう。じゃあ後でたっぷりお説教しないと」

そう言った優果の顔も少し暗くなったのに、哀は気がついた。

(……この人、何を)

「まったく、江戸川君たちには補習プリントを出しておきますね。じゃあみなさん、授業始めましょう」

哀の疑問も、一瞬で切り替わった優果の顔によって打ち消された。

(……さっきの暗い顔 。 気のせいね)

哀は教科書を取り出すと、心の中ではコナンと歩美のことを考えながらも、表面上は真面目に授業を受けた。

・
・
・

「で？ 話ってなんだよ、歩美」

コナンは歩美に呼び出され、屋上に来ていた。今日は風が吹いて

いて気持ちいい。

（　　ここ、サボりに使えんな）

コナンがそんなことを考えていると、歩美が声をかけてきた。

「　　ねえ、コナン君」

「ん？」

「　　コナン君は、哀のことどう想ってるの？」

実はこの問いかけは、コナンの予想していたものだった。

「そーだなー。どうって……近所の人とか、同級生とか？」

コナンは、知っててあえて別の答えを言ってみた。

「そーいうのじゃなくって……。じゃあ、質問変えるね。コナン君はもう哀のこと許してる？」

次いで歩美の口から出た言葉は、コナンにとっても予想外だった。

「許してる……って……」

「コナン君と哀、小学校のときから全然口利いてないでしょ？ 哀に聞いたの、私。『ケンカでもしたの？』って。でも、何も教えてくれなかった。私たち、親友だと思ってたのに……」

そーいうと歩美は少し俯いた。

「でも、いいの。そのときはショックだったけど、今考えれば、人
って誰にも話したくないことがあるんだって、わかるもの。だから、
私の願いは一つ」

歩美は、コナンの顔を真っ直ぐに見た。

「お願い。昔の二人に戻って。また、みんなで遊ぼうよ。ムリ
に仲直りしろとは、言わない。でも、いまの姿の哀を見るのは、
とつてもつらいの。だから、コナン君が許してるんだったら」

その言葉を言ったときの歩美の眼は、とても澄んでいて綺麗だと
コナンは思った。

「歩美」

コナンが低い声で歩美の名を呼ぶ。

「なに？」

いまの歩美には、小さい頃の無邪気さはなかった。ただ純粹に、
哀のことを心配している。

「正直いって、自分でもアイツのこと許してるのかどうか、わから
ねえんだ」

「え？」

思いがけないコナンの告白に、歩美は目を白黒させる。

「この前、俺の母さん　有希子さんに会ったろ？　そんとき言われたんだ」

「なんて？」

「『なんで自分の気持ち認めないの？　哀ちゃんはおなたに無視されても、酷い言葉かけられても、ずっといまままで我慢して耐えて、新ちゃんコナンのこと想ってきたのに……』って」

歩美は有希子の言葉を噛みしめ、俯いた。

「……有希子さん……」

それから、しばし沈黙が続く。気まづくはないが、お互い次の言葉が続かない。二人してずっと空を見ていた。　青く澄んだ空。コナンはさっきの歩美の目を思い出した。

歩美は、黙りこくったコナンをみて、声をかけた。

「　とりあえず戻ろっか？　コナン君」

「いや、俺はこのままサボる。歩美だけ、行っててくれねーか？」

なんとなく、コナンはサボるんだろうな、と歩美は思っていたので、深く介入したりはしなかった。

「うん、わかった。　あ、コナン君」

「うん？」

まだいい忘れていたことがあったのか、と思い、空を見上げていたコナンが歩美のほうを向く、と。

「私、コナン君のこと大好きだから！ でも、コナン君が哀のこと好きなんだったら、二人を応援するよ！！ お幸せに！」

そういつて、屋上の入り口のドアをくぐって教室へ戻っていった。

「……強^{つえ}いな、歩美。おまえ、ホントいい女だよ」

彼女なら、自分よりもいい男を見つけられるだろう。一人残されたコナンは、青く澄んだ空を見上げてそんなことを思った。

No.7 歩美の告白(後書き)

すみません！

急いでかいて、見直したかもあんまりしてないので、誤字脱字等
あると思います。

見つけれたらご報告お願いします。

一人教室に戻った歩美は、ドアの前で右往左往していた。

「……どうしよう、入っていいのかな？ 先生、絶対怒ってるよね……」

そんなこんなで五分間ずっとウロウロしていた。そして、最終的に「まあでも、あと五分で授業終わるし。トイレにでもこもってればいいか」という判断になった。ドアのところで待っていて、授業が終わってから出てきた先生に見つかったらそれこそ厄介だ。

「あーもートイレってどこだっけ？」

まだ学校に入学したばかりなので、いまいち校舎の構造がつかめない。しばらくさまよい、やっとトイレを見つけた。

「あー、よかった。ここに隠れてよ」

歩美がトイレに入ろうとした、そのとき。

がさつと、トイレの方から音がした。

（ え、何?? ）

未だにお化けや妖怪などを信じている歩美にとっては、とても恐

ろしかった。

(こ、怖い)

咄嗟に逃げようと思ったが、足が震えてその場から離れられない。

(ど、どうしよう……)

そうこうしているうちに、その『お化け』が出てきた。

「きゃ〜!!!!!!」

歩美が大音量で悲鳴を上げた。すると。

「歩美？」

落ち着いた声が入から降ってきた。

「……あれ。哀？」

なんでここに、と聞こうとしたが、哀が歩美の口を手で塞いだため、声が出なかった。

「静かに。さつき、あなたが悲鳴をあげたから、誰か来るかもしれない。いま、授業中なんだから、見つかったら相当怒られるわよ」

哀が小声で囁く。

しばらくすると本当に誰かが来た。よくは見えなかったが、先生のような。

「おかしいわね……。さつき、悲鳴のようなものが聞こえた気がしたんだけど」

それは、クラス担任の優果の声だった。

歩美が「先生」と言ってトイレから出て行くこととする。それを哀が必死で押さえつけて阻止した。

「まったく、それにしても江戸川コナン、吉田歩美、そして灰原哀。あの三人、どこに行ったのかしら。灰原哀はトイレに行くといっただけ、帰ってこないし。吉田歩美も、初日にコナンを連れて授業前に出て行ってサボリとは、なかなかいい度胸してるじゃないの。ふふふ。二人ともたっぷり教育してあげないといけないよね」

歩美は、さつきとは別人の『先生』を見た。一時間目の自己紹介のときは全く違う、狂った表情をしていた。

「そして、江戸川コナン。彼を必ず私のものにしてやるわ」

不気味な笑いを残して、優果は去っていった。

優果が完全に行ったのを確認してから、哀と歩美は止めていた息を深く吐いた。

「はー。疲れた」

「『疲れた』じゃないよ、哀！ どうするの！？ あの人、なんか不気味だったよ！?!?」

なんかコナン君のことも言ってたし！ という歩美の言葉を聞いて、はつとする。

「……歩美、江戸川君とは、なんの話をしてきたの？」

途端に歩美がびくつと震えた。

「えへ。そんな哀に聞かせるほどの大した話ではありませんので」

そういつて、教室に戻ろうとくるつと背を向けた歩美を、哀は腕を掴んで引き止めた。

「まさか……また余計なことを言ったんじゃないでしょうね？」

につこり笑ってはいるが、怖い。歩美は、本能的にそう察知した。

哀が歩美の手を離す気配はまったくくない。こういつときの哀は全然ひかない。

歩美は早々に諦めた。

「えっと……。哀のこと、できれば許してあげて、って」

「やっぱり、余計なこと言ったのね……。まったく……。江戸川君、何か言ってた？」

哀も、歩美がコナンに哀のことを聞いたということは想定して

いたらしく、特別驚きもせず、次の言葉を促した。

「うん……私が『哀のこと、できれば許してあげて』っていったら、コナン君、『俺、自分でも灰原のこと許してるのかどうかかわからない』って……」

コナンのその言葉を聞いたときの哀の横顔は、悲しんでいるわけでも喜んでいるわけでもなく、どこか昔を思い出すような、遠くを見て懐かしむような顔をしていた。

「……そう……」

哀の言葉を最後に会話が途絶え、しばらく二人して黙っていると、授業終了のチャイムが学校に鳴り響いた。

「……もう授業終わったから、戻ってもよさそうね」

いきましよう、と哀に声をかけられ、歩美は彼女についていつて教室に戻った。哀は教室へ戻る途中、なんとなくという風に歩美に声をかけた。

「久住優果……気をつけたほうがよさそうね」

「うん、そだね……」

歩美も、哀と二人でトイレのところに隠れていたときに優果が言っていた台詞がずっと心に引っかかっていた。

『ふふふ。二人ともたっぷり教育してあげないといけないようね』

。

あの言葉が、歩美を恐怖に突き落とす。

『　そして、江戸川コナン。彼を必ず私のものにしてやるわ』

この言葉を言ったときの優果の表情を思い出して、歩美は身震いした。

No. 8 優果の恐怖（後書き）

またまた急いでかいたので、誤字脱字等あると思います。
ご指摘よろしく願います。

感想なども待ってますのでぜひ書いてください

コナンたちが帝丹高校に入学してから一週間が経った。

相変わらず、コナンと哀は口を利いていない。そんな中、事件は起こった。

コナンは、今日もいつもと変わらず工藤邸のドアを開ける。すると、ちょうど同じタイミングで隣の阿笠邸から哀が出てきた。

「おはよう」

「……………」

哀は挨拶をしたが、コナンはいつもどおりに無言で歩いていった。

（私は、毒薬を作って、それなのに今ものんきにのうのうと生きている女よ。なのに、なんで罵ってくれないの？）

いつそ、怒鳴ってくれればいいのに。怒鳴って、罵って、罵倒してくれば貴方コナンに対するこの胸がはちきれそうな想いも、罪悪感も、全て忘れられるのに。

そんなことを考えているうちに、コナンと哀はいつもの探偵団との集合場所についた。

「あ！ 哀、コナン君！！ おはよー！」

「おはよう、歩美」

「……はよ」

コナンはいつも朝はテンションが低めだ。哀はここ数年でコナンのことを理解してきた。

元太はいつものごとく時間にルーズで、まだきていない。

「あれ、珍しいね！ 二人一緒にきたの？」

「ええ、偶然家を出たら会ってね」

しばらく哀と歩美で話していると、元太がきた。

「わりいわりい、寝坊しちまったぜ」

「も〜、元太君遅い！」

今日も歩美の叱責から一日が始まり、学校へ向かう。いつもどおりの朝、のはず。

（ なんか、静かすぎる気がする ）

しばらくしてコナンは異変に気がついた。

（ いつもはアイツ、歩美と話してんのに。なんで今日はこんなに静かなんだ？ ）

歩美と元太は、二人で話していて哀の異変に気づいていないようだ。

「おい灰原、なんかお前今日」

コナンは、「変だぜ」と続けようとしたが。

「いえ、何でもないわ」

哀は、コナンが全ていい終わる前に、相手の言うことを予測して返事を返した。

コナンが哀に話しかけるのは、本当に久しぶりだった。相手が言おうとしようとしていることを理解し、全てを聞く前に質問を予想して答える、この感じ。

懐かしい、とコナンは思った。こんな会話、哀としかできない。しかし、その相手の哀とは、長い間口を利いていなかった。

だが、今は懐かしんでいる場合ではない。

「でも、やっぱり様子が」

「だいじよ、」

「大丈夫じゃない」

『大丈夫』。昔から、哀がよく使う言葉。しかし、大丈夫といっ
ていても大抵は大丈夫ではないことが多いということを、コナンは

よく知っている。そして、大丈夫といった彼女が、コナンの言うことを全く聞かないということも。

「……具合悪そうにしてたら、すぐに家に追い返すから」

今のコナンには、それくらいしか言えなかった。

・
・
・

一時間目・理科、二時間目・数学、三時間目・道徳、四時間目・国語。給食、昼休み　とコナンはずっと哀の様子を見てきたが、明らかに具合が悪そうである。だが哀が必死で気分が悪いことを隠そうとしているためか、周りの人は誰一人として彼女の様子がおかしいことに気づかない。

そして、五時間目・体育。これが問題の授業となった。

体育は、身長順で整列する。このクラスは男女比が大体同じくらいなため、女子のなかで背が高いほうの哀と、男子のなかで背の高いほうのコナンは並ぶとちょうど隣になる。

「おい灰原、いい加減にしろよ」

「……な、にが」

「『なにが』じゃねーよ！ そんなひ弱そうな声出しやがって。今先生のところ突き出してやるからな」

「コナンは、具合の悪そうな哀にそう断言した。」

「……ダメよ」

「あ？」

「私は、あなたの体の状況を見ていないといけないの。私たちの体の中には、まだAPT-X4869の毒が残ってる。いつ私たちが倒れてもおかしくないわ……。あなた、私がないときに倒れて病院送りになったら、どうするつもり？ 病院に行っても、手当てのしようがないわ。下手をすれば死んでしまつかもしれない……。私がつくった毒よ。私がそばにいるのが一番安全なの。気休めになる薬を作ってあげられる。だから……」

哀の言っていることは、おそらく本当なのだろう。コナンと哀は解毒剤を飲んでいないので、確かにいつ何時倒れてもおかしくない。

だが、おそらく哀は「倒れたときに診てあげるため」という理由だけではなく、「彼を死なせたらいけない。あの薬をつくったのは私なんだから……」という罪悪感からもあり、学校に残るといつているのだろう。

その気持ちを理解できないコナンではない。

「……今回は見逃してやるけど、次ふらついたりしてたら家に連れて帰るからな」

「コナンはとりあえず、今は哀にそう伝えた。」

No.9 罪悪感(後書き)

やっと灰原さんと江戸川君、口利けましたー!!
二人が話せてよかったです

じゃんじゃん会話さていく(予定です)ので、これからまじまじとぞ
よろしく願いします。

No.10 会いたくなかった

「おい、そこ！ 江戸川と灰原！ うるさいぞ、私語は慎め！」

「すみません」

哀としゃべっていたコナンは体育教師に怒られ、二人して謝った。

「よし、じゃあ今日はバスケットをする！ ルールを知らないやつはいないと思うが、一応説明しておこう。まず、バスケットというのは」

熱血系の体育の男性教師がバスケットについて語りだしたところで、コナンは哀を見た。

普段どおりの、どこか冷めた、けれども顔のパーツが整っていて綺麗な顔。

（無理して、倒れなきゃいいけど）

しばらくして教師のバスケットについて（なんかたまにその教師の人生経験談が入って長くなった）の話が終わり、試合形式のゲームが始まった。

男女強さが偏らないように、同じくらいの強さの人と二人組みをつくり、グットツッパ（グーかパーを出して二組に分けるもの）をし

て、チーム分けをした。コナンと哀は二人ともグーを出し（手の形をグーから変えるのがめんどくさかったから）、同じチームになった。

試合開始三分、コナンがパスされたボールをキャッチして、そのまま鮮やかに3Pシュートをきめた。

「きゃ〜!」

「コナン君かつこいい!」

これで勢いづいたコナンたちのチームは、さらに八点追加した。

「おお〜」

歓声があちこちであがる。

だが、コナンはずっと哀の様子を見ていた。明らかに彼女の動きがおかしい。もともと哀は運動がそこまで苦手でもない（ズバぬけができるというわけでもないが）ので、いつもは少しはボールに触ったりするのだが、今日はまだ一回も触れていない。それに、少しふらついているような気もする。

コナンが不審に思っていた、そのときだった。

「 危ない!」

誰かが、叫んだ。哀のほうにバスケのボールが一直線に飛んでくる。ぼーっとしている哀は気づいていない。

「灰原、避ける!!」

「え?」

コナンは哀のほうに全速力で走った。ボールが哀の顔面に当たる前に、パシッとつかみ、そのまま味方にパスする。

その行動の鮮やかさに、ほとんどの女子がコナンに見惚れた。それと同時に、助けられた灰原に羨ましそうな視線を向ける。

だがコナンは、いまの哀の反応の遅さでわかってしまった。哀は、いまはもう運動や冷静な判断ができる様子ではない。

(灰原 タイムリミットだぜ)

コナンが哀のところにかけてよる。と同時に、彼女の膝が力を失い、コナンのほうに倒れこんできた。咄嗟にコナンは哀の肩を支える。

「おい、ちょっと灰原」

「工藤君」

「わりいけど、約束どおり連れ帰らせてもらおうから」

「わかったわ」

哀はもう抵抗しなかった。否、抵抗する気力すら残っていないなかった。

「俺、先生のところ行って、灰原の具合が悪いつて言ってくるから。一人で立てるか？」

「ええ」

哀がそう返事をする、コナンはそっと哀の肩を離した。

「じゃ、ちょっとそこら辺に座って待ってる」

コナンが先生のところに向けよっていくのを、哀はうすれゆく意識のなかで感じた。

しばらく待っていると、コナンが哀のほうへ戻ってきた。

「灰原、大丈夫か？ どうか辛いとか、ないか？」

「大丈夫……」

ああ、どうしてコナンはこんなに優しいの？ 私は、この世に存在する価値のない人間なのに。

この人と、出会いたくなかった。会わなければ、こんな想いを知ることなんてなかったのに。

「え？」

哀としては、口に出しているつもりはなかったのだが、コナンが何か聞き返したところを見ると、口に出してしゃべっていたらしい。だが、小声だったのか、よく聞こえていなかったようだ。

「私、あなたなんかには、会いたくなかった……」

それを最後に、哀の意識はぶつとりと途切れた。

・
・
・

『そんなこと言うんじゃないよ』

どこからか、いま私が一番声を聞きたくない人の声が聞こえた。

『俺は、俺は、おめえに出会えてよかったって、そう思ってる。おめえに会えなかつたら、俺、きつと昔のままだった。世の中に、辛い人がいっぱいいるってこと、なにも知らないですごしたと思う。APTXで小さくされたからって、自分が一番辛い思いをしていると勝手に思いこんでた。俺より辛い思いしてるやつなんて大勢いるのに。俺にそのことを気づかせてくれたのは、お前なんだよ、灰原。だから』

だからあなたは嫌いなよ。その口、綺麗なことしか言わないでしょう？

『だから、泣くな』

泣くな？ 誰が泣いてるって？

冗談はいい加減にして。私が泣くわけないでしょう。泣く価値もない人間なのよ、私は。泣くことなんて、許されない。私の作った薬のせいで、どれだけの人々が辛く、悲しい目にあっただか……。

あなたも、その中の一人。私のせいで、人生が狂ってしまった人。
私さえいなければ、いまごろ愛しの彼女と一緒に。

『灰原。俺、お前のことが』

江戸川君が私に何かを伝えようとした瞬間、私は彼の声を振り切るように目を開けた。

・
・
・

哀が目を開けると、見慣れない天井があった。

「ここは……」

「お、気づいたか？」

声が聞こえてその方向を向くと、見知った顔があった。

「江戸川、君？」

「ああ。俺、保健委員だから」

声は普通だが、なぜかコナンの顔が赤い。しかし哀はそのことについては言及しなかった。

「そう、だったの……」

哀は自分が倒れる前のことを思い出そうとしたが、記憶が微妙なところで途切れていてさっぱり思い出せない。

「ねえ、私どうなったの？」

哀が聞くと、コナンは少しムツとした表情になった。

「お前、体育の時間に倒れたんだぜ。つたく、だから無理すん
なって言ったのに。それで、保健委員の俺がお前を保健室まで運ん
できた。あ、ちなみにいつも保健室にいるあのクソババアは今日出
張でいないんだとさ。で、俺がいままでお前を看病してたってわけ」

「そう」

哀は大体思い出した。

「じゃ、帰るか。もう六時だし。部活やってるやつ以外、みんな帰
っちゃったぜ」

「あら、もうそんな時間なの？　じゃあ早く帰りましょう。博士が
お腹空かしてるわ」

コナンは内心、「やっぱコイツは博士が一番なのか」と思い、ち
よっと悲しい気持ちになった。絶対「俺と博士どっちが好き？」と
聞けば、彼女は「博士」と即答するだろう。

コナンがちょっと落ち込んでいると、そういえば、とあることに
気づいた。

「　　そういえば俺靴教室だ！　やべっ」

「　　あ、私のも教室だわ」

「え、まじで?? じゃ、おめーのもとってくるからちよい待ってる!」

そういうと、コナンは勢いよく保健室から出て行って、二階の一年教室まで鞆をとりに行った。

No.10 会いたくなかった(後書き)

Rukaです!

最近テスト勉強してて、なかなか投稿できずにすみませんでした。

もう夏休みに入ったんで、これからはどんどん投稿していきます
!!

と、言いたいところですが、今度は夏休みの課題におわれる
ことになりそうです。

理科の宿題が多い!!

「ねえ、コナン君。昨日、哀となにしゃべってたの？」

十分休み、コナンの席に来た歩美は、いきなり彼にその話題を持ちだした。

「え？」

コナンは、急にその話を持ちかけてきた年下の少女を見た。

「だからー。昨日哀とコナン君、体育の授業のときしゃべってたでしょ？ あのととき、なに話してたの？」

「ああ、そのときなら」

コナンはほっとした。今日、哀は昨日具合が悪かったため、欠席である。

「灰原あいつの顔色が悪そうだったから、無理すんって言ったただだよ」「ふーん。じゃあさ、『そのときなら』ってことは、別のときにまだなにか二人でしゃべったの？」

コナンはかなりぎくっとした。

歩美は最近、いわゆる『乙女の勘』というものが発達してきている。

「あ、そういえばコナン君って、昨日哀を博士の家まで送ってあげたんでしょ？ でも昨日って、博士学会に行っていてないって、哀が言ってたような……」

コナンはだらだらと冷や汗を流した。 ヤバイ。

「もしかしてコナン君、博士いなくて哀と二人っきりだからって、昨日哀になんかしてないよね？」

かちーん、とコナンは固まった。

「……し、してねえよ。ていうか、俺らそんな関係じゃねーって……」

「うーん、それもそっか」

咄嗟に出た言葉で、かなり苦しいと自分でも思ったが、素直な歩美はそれを信じたらしく、あっさりその話題は終わった。

「あ、ねえねえコナン君知ってる？ そういえばさ」

「……え？」

次の瞬間、歩美の口から発された言葉に、コナンは驚愕した。

「悪いな、灰原。お前具合悪いのに、事件に付き合ってもらっちゃまって」

昨日の帰り道、哀に肩をかしていたコナンは、阿笠邸の門の前まで来るとそう言った。

「いいえ。こんなこと、これまであなたが私にかけた迷惑の数々に比べれば、なんてことないわ」

「……スイマセン」

コナンは、ベルモットのところまで哀に変装して乗り込んだり、水無怜奈の靴の底にガムに包まった盗聴器をつけたりするなど、覚えがありすぎるほどあったので、謝った。

「わかればいいのよ」

「……ハイ」

コナンはいつになっても哀に敵わないのだった。

「まあ、いいわよ。さっき保健室で寝させてもらったから、随分気分も楽になったし。それと、送ってくれてどうもありがとう」

哀にしては珍しく、素直にお礼を言った。

「じゃ、私はこれで……」

そう言って別れようとした哀を、コナンが引き止めた。

「あ、俺看病するぜ?」

「え? なんで?」

てっきり自分を家まで送ったら帰ると思っていた哀は、びっくりしてコナンの顔を見た。

「なんでって……。だって今日、お前んとこ博士いないんだろ? 歩美から聞いたぜ」

「ええ、そうだけど……でも」

「大丈夫だって。襲わねーし」

「誰もあなたが私を襲うほど度胸があるなんて思ってないわよ。へタレな名探偵さん?」

哀がそういうと、コナンはちょっと俯いて悔しそうな(?)顔をした。

「そうね……でもまあ、博士いないから看病してもらおうかしら?」

「え? まじで???」

「そのかわり、しっかり働くことね」

そういい残すと、彼女は一人でさっさと家の中へ入っていった。
まった。

コナンは、哀の人使いの荒さを思い出し、少し顔をしかめたが、
哀の後を追って阿笠邸に入ってしまった。

「あ、そういえばよ」

哀が阿笠邸のリビングに入ると、玄関で靴を脱いでいたコナンが
声をかけてきた。

「何？」

「おめえ、さっき俺が言ったこと聞こえてただろ？」

哀はコナンの会話の意図が全く読めず、訝しげに首をかしげた。

「??? なんのこと？」

「……もしかして、本当に寝てた？」

コナンも哀の後を追って、阿笠邸のリビングに入ってくる。

そして、哀にどこからか持ってきた体温計を手渡した。どうやら
「測れ」ということらしい。

「??? いつ？」

「六時頃、保健室で」

「ああ、寝てたわよ」

哀が肯定しつつ体温計を脇に挟むと、コナンはなぜかがくつと落ち込み、頭を抱えてリビングのソファに座り込んだ。

「まじかよー！！ お前、ちょうど言いタイミングで起きるから、狸寝入りしてると思って超焦ったのに！」

哀に聞こえていないとわかって、（多少落ち込んだが）冷静さを取り戻したコナンは、すくつと立ち上がって、勝手に博士のタンスの上から三段目を開けた。おそらく、冷却ジェルシートでも探しているのだろう。

「何て言ったの？」

「俺、お前に出会えてよかったって、言ったんだけど」

このタイミングで、哀が脇に挟んでいた体温計が「ピピピピ」と機械的な音を鳴らし、計測結果が出たことを伝える。

哀が測定値を見てみると、三十七度三分だった。さっき家に戻ってくる前に保健室で測ったときは三十七度六分だったから、まあちよつとは下がったということになる。

「あの声、本当にあなたの声だったの？」

冷却ジェルシートを探してタンスをごそごそあさっていたコナンの手が、哀の言葉に反応してぴたっと止まった。

「え？」

「寝ている間、夢を見たのよ。あなたが、私に、なにか言おうとしてたわ」

哀がそう言つと、コナンは顔を赤くした。

「あれは、夢じゃなかったのね……。じゃあもしかして、私の夢に出てきた方ではないあなたも、あの時私になにか言おうとしてたのかしら？」

「そ、それは……」

哀は、口ごもってさらに顔を真っ赤にし、俯くコナンを急かした。

「なによ。男だったらはっきり言いなさい」

コナンは哀の言葉を聞き、俯いていた顔を勢いよく上げた。

「俺、お前が好きなんだ!!」

「……は？」

「だから、俺はお前が好きなんだよ。灰原」

突然のコナンの告白に、哀は困惑する。

「あなた、何を言ってるの？ だって、彼女が」

「蘭は、もう工藤新一のことなんて待つてねえし、必要ともしてねえよ。俺がいなくても、生きていける。それに、アイツいまは、」

本堂瑛祐と付き合ってるんだ」

いまから三年前の冬、つまり蘭たちが二十三歳のとき、本堂瑛祐はアメリカから日本に一時帰国した。その際、毛利探偵事務所に立ち寄って、蘭に自分の想いを告げたらしい。

蘭はそのとき、新一が死亡したということを入藤夫妻から伝えられたばかりでショックが大きかったため、「いまはそういう気にならない」といって断ったそうだ。

だが、それから一年後、また瑛祐が蘭に「僕はヨボヨボのご老体になっても、いつまでも蘭さんのことを想い続けます！」と熱烈アプローチをした。蘭は、コナンから「江戸川コナン」工藤新一」という真実を教えてもらい、新一への思いを吹っ切れたため、現在は結婚を前提に付き合っているらしい。

「蘭、^{アイツ}幸せそうだったよ。楽しそうだった。本堂なら、蘭を泣かせるようなことはしないだろ」

「そんな……」

コナンの口から告げられた真実に、哀は目を丸くする。

コナンはダンスからめあての品（＝冷却ジェルシート）を見つけたようので、「あったあった」と言いながら哀のほうに近付いてきた。

「ごめんなさい。私のつくってしまった薬のせいで、^{あなたたち}蘭と新一を引き離してしまっ……」

哀は、目に涙をいっぱいためて、コナンに謝った。

コナンは「気にすんな」とでも言うように、哀の頭を軽くなで、おでこに冷却ジェルシートを貼ると、彼女をそっと抱き寄せた。

哀は、それでも何度も何度も「ごめんなさい」と、謝罪の言葉を口にする。彼女の目からついに溜まっていた涙が落ちた。

コナンは、そんな哀に優しく口付けた。

哀がコナンにキスされたと気づいたのは、すでにコナンの唇が離れていった後だった。

哀が呆然としていると、コナンは顔を下に向けて悪イ、と謝った。そして、そのまま哀と目を合わせることなく彼女を寢室のベッドまで連れて行き、そのまま布団をかけて寝かせた。

「俺、本気だから」

そういうと、コナンは阿笠邸を出て行った。

みなさんごーもこんにちは

この話を読んで、「あれ、なんかいつもより長くね?」と思われた方……。もしいらっしやいましたら、その方は観察眼が鋭いな。

それは勘違いではありません。

今回の話は、いつもよりも1.5倍ほど長くなっております。

普段は本文大体2000文字くらいにしているつもりなのですが、なにしろサブタイトルが「進展」なものですから……。

タイトルどおり、二人の間を進展させようと奮闘したところ、このような長さに……。

もう少し（100〜200文字くらい?）短くしようと思えばできたかもしれないですが、一回「まあいいか」と思ってしまったから、思考がだんだん進まなくなってしまいました……。

あはは

どこをカットするか考えるのに頭がついていかなくなってしまつて、カットしようと思つて見直ししてるのに、「あ、ここ付け足さなきゃ意味わかんないよ〜」というところがたくさん見つかつて、付け足していたらさらに長くなつてしまつたんです!

なんか、話だけでなくあとがきも長くなったような……？
まあ、その辺は大目に見てやってください。

ちなみに、コナン君は毛利探偵事務所を出て、工藤氏の家に住んでいる設定です。

次回もよろしくお願いします。

「君……コ、ナ……コナン君!!」

「え?」

昨日のできごとを走馬灯のように思い出していたコナンは、歩美の声でスツと現実に取り戻された。

「大丈夫? 顔色悪いみたいだけど……。まさか、昨日ずっと保健室で哀の看病してたから、風邪がうつったんじゃない?」

「いや、うつってねえって。大丈夫」

「ホント? ならよかった」

歩美は明らかにほっとした様子だ。

「そういえば、哀どうしてるのかなあ……」

歩美が、遠くの空に浮かんでいる大きな白い入道雲を眺めながらいった。

「さあな……寝てんじゃない?」

「コナン君、今日哀のところにお見舞いに行く?」

実のところ、コナンは、昨日のできごとがあつて気まずいので、できるだけ哀とは顔を合わせたくなかったが、彼女の様子が今日一日ずっと気になっていてしょうがなかった。確か、博士は今日の夕方ごろに帰ってくると言っていたので、哀はいま一人で家にいるということになる。

「そうだな……。今日は、教師たちで集まる市の職員会議があつて、短縮四限授業で部活なし・給食なしらしいし、博士もいなくて灰原^{アイツ}大変だろうから、行ってみるか？」

コナンが哀のところに見舞いに行く、というだけで、歩美はとびはねて喜んだ。

「ホント？ よかった〜。歩美たち、ほんとにみんな嬉しかったんだよ！」

そういいながら、歩美は「ね！」といつの間にか後にいた元太を振り返る。

「おう！ 俺、昨日光彦にメールして教えたからな！」

「なにを？」

コナンが不思議そうな顔をして聞く。

「コナン君と哀が久しぶりにしゃべったってことだよ！」

歩美が、コナンのほうを見て、にっこり笑って嬉しそうな顔をす
る。

「あ、それじゃあ、今度の日曜みんなでコナン君の家に行って、
哀とコナン君の仲直り記念パーティーしよう！」

「お、いいな！ あ、光彦も呼んで久しぶりに探偵団で遊ぼうぜ！」

そうしよう、といって勝手にパーティー開催場所にされた家主（
コナン）に了承もとらずに話が進んでいった。

・ ・ ・

（ 面倒だわ…… ）

哀は、阿笠邸の地下の研究室の冷たい床に座っていた。近くにベ
ッドも椅子もあったが、なぜか哀は今は床に座りたい気分だった。

冷たい床に座ると、ぼうつとしていた頭がだんだんすつきりして
きた。

熱のせいではぼうつとしていたのではなく、昨日コナンが言ったあ
の言葉のせいで、今日一日中頭が混乱していた。

正直に言えば、今日、哀は別に風邪で学校を休んだわけではない。
たしかにまだ熱は多少あり、頭もがんがんで痛いような気がする
が、我慢できないほどではない。しかも今日は体育や技術などの移
動教室の授業はなく、短縮四限だったので、学校に行ってもたいし
て支障はでない。しかし、まだ返事を返せない状況でコナンに会う
のは気まずいと哀は判断し、学校に行かないことにした。

（お姉ちゃん……私、どうしたらいいの？ 私……まだ、彼のこと
が ）

もちろん、哀は今でもコナンのことが好きだ。その想いは隠すつもりもないし、消そうとも思わない。昔、コナンのことを忘れようと努力したこともあったけれど、結局忘れられなかったため、今はもう想いを消すことは諦めている。

（蘭さんは、私の正体を知っているのかしら……？）

数年前、博士から「コナン君が、蘭君に自分の正体を言ったらしい」ということは聞いた。「自分の正体を言った」ということは、「江戸川コナン」「工藤新一」ということを伝えたのは確かだ。だが、コナンが「灰原哀」「宮野志保」ということを伝えたのかどうかは、哀は知らない。

蘭が「灰原哀」「宮野志保」という事実を知っているのだとしたら、なおさら自分はコナンの告白を受けるわけにはいかないだろう。コナンが蘭に「灰原哀」「宮野志保」ということを話した、となると、彼女は「宮野志保（＝灰原哀）」は、蘭と新一の仲を引き裂いた張本人のくせに、あるうことか今新一と付き合っ普通の人のように生きている。罪人のくせに」と思うだろう。

また、蘭が「灰原哀」「宮野志保」という事実を知らなくても、哀は「自分が幸せになってはいけない」

と強く自己暗示をかけているため、コナンの告白は受けないつもり
でいる。

（……そうよ、昨日のことは忘れましょう。コナンのためにも、蘭

のためにも、自分のためにも。この選択が、みんなが幸せになれる最善の道だもの……)

昔読んだ、なにかの本にかいてあった。

他人を幸せにするためには、自分が大変な苦勞しなければいけないこともある、と。

その本の主人公の少女は、自分の幸福を失ってまでも好きな男のために自分の人生を全てささげ、道を切り開き、駆け抜けた。そして、自分のやることを成し遂げたあと、死んでしまった。

その本を読んだとき、「自分も、きつとそういう運命なのだろう」と哀は思った。蘭とコナンを幸せにするために、自分の気持ちを封じなければならぬ。それが、自分の運命。

「運命は変えられる」とよく言うけれど、そんな簡単なことではない。確かに、変えようと思えば変えられるのだろうが、天の定めたものに逆らうと、人は罰を受ける。あとで、その代償をはらわなければならぬ。

その「代償」が、自分ひとりですめばいいのだが、物事、そううまくはいかない。自分以外の誰かにも災難がふりかかるようになっていく。

自分と全く関わりのない人や動物、自然が被害を受ける。哀にとっては、それがたえられなかった。

哀がそんなことを考えていると、阿笠邸のインターホンが鳴った。

（ 誰かしら。宅配便とか？）

そう思っただけで扉を開けると。

「よう。元気だったか？」

いま、一番会いたくなかった人が、玄関に立っていた。

No.12 決意（後書き）

こんにちは。

毎日暑いですねー。

私の住んでいる地域は、ここ三日（三日くらいだけ？）雨が続いてて、川がやばかったです。

水の色が茶色くにこり、水位はいつもの二倍以上に……。

あんまり台風とか来ない地域なので、経験したことのないほどの強い雨に驚きました。

次回もよろしくです。

哀は、玄関に立っているコナンの存在に驚いた。

「……工藤君……。なんで、ここに？」

「いや、今日は短縮授業で早く帰ってこれたし、家も隣だし、博士まだいないみたいだし、ちょっと様子でも見てこっかなと思って……」

「そう」

コナンがきたせいで、哀が今日学校に行かなかった意味がなくなってしまった。

（ちゃんと、告白、断らないと）

哀は、さっき決めた決意を揺らがせないために、もう一度心に鍵をかけなおす。

「とりあえず、あがって」

「……おう、さんきゅ」

リビングに通されたコナンは、とりあえず哀に当たり障りのない話の話題をふった。

「元氣そうで、安心したよ」

「ええ」

そっけない返答。会話が途切れる。

「……博士、夕方まで帰ってこないんだってな」

「ええ」

「……具合どうだ？ 大分よくなったか？」

「ええ」

哀の返答がいつも同じだ。コナンは少々ムツとした。

「……お前、『ええ』以外になんかいえねえのか？」

「……だってあなたが、私が『ええ』って答えるしかない質問をしてくるんだもの」

そっいえばそうだったかもしれない、とコナンは悟った。

「……悪い」

「わかればいいのよ」

哀がふつと不敵に微笑む。

「……なんか、前もこんな会話しなかったっけ??」

「……そういえば、したわね」

コナンが記憶を探り当てる。

「たしか、昨日俺たちが学校から帰って、阿笠邸に着いたときだったよな??」

「そうだったわね……」

不意に、哀は懐かしい気持ちに襲われた。あの会話のあと、コナンに告白されたのだ。

「あのあと俺がした告白の返事、出た?」

「ええ。考えさせてもらったわ」

哀は目を閉じた。そして、深く深呼吸をする。

「私、あなたの気持ちに答えることはできない」

言えた。この気持ちを伝えるのに、哀は向こう一年分の勇気をかき集めた。

「……嘘ばっか」

「え?」

コナンが発した言葉に、哀は驚いた。

「……」

そういって、コナンが哀の頬に触れる。そこには、涙が流れていた。

「あ」

綺麗な嘘がつけている、自信があったのに。これでは、せつかくの覚悟が台無しだ。

「まったく、バレバレなんだよ」

「……………」

哀はうつむいた。

（ どうしよう。綺麗に嘘をついて、「ごめんなさい」といって終わるはずだったのに ）

「 ……で？ お前の本当の気持ちは？ 」

コナンが、哀を見つめてくる。この真っ直ぐな眼に、哀は弱い。

「私、は……………」

哀は、そのまま黙り込んでしまった。

・
・
・

歩美は、コナンが哀のところへ向かうため猛スピードで教室を出て行ったあと、元太と二人でのんびり帰っていた。

「コナン君と哀、うまくいったかなあ」

「さあ？ どうだろうな」

元太が歩美からコナンと哀についての相談を受けるようになってから、けっこうな月日が経つ。

「哀ちゃんって、絶対コナン君のこと好きだと思っのー!!」

まだ、歩美が哀のことをちゃん付けで呼んでいた頃。元太は、哀がコナンのことを想っているなんてことは微塵も感じ取っていなかったため、当時小学校中学年だった歩美からそのことを告白されたときは、正直「コイツ、観察力ねえな……」と思った。

だが、実際観察力がなかったのは自分のほうだった。

歩美のその言葉を聞いてから、たまにコナンと哀の様子を見てみると、哀がコナンのほうをじっと見ていることがたびたびあった。それに、コナンが他の女子としゃべっているとき、哀がひどく哀しそうな顔をしているのを目撃したこともあった。

元太が、そのことを歩美に言つと「やっぱりねー!!」という反応が返ってきた。

「元太君、コナン君と哀のことくつつけるの、手伝つてー!!」

歩美にそう言われたときは、正直あまり賛成できなかった。

元太は、歩美が無理してコナンと哀を結び付けようとしているのではないかと思った。歩美の笑顔が、いつもと違った。いつも歩美のこことを見つめている自分が言うのだから、間違いない。

「お前、自分の気持ちはいいのかよ!？」

歩美は、小学一年生のときから、ずっとコナンのことを想っている。その気持ちは、生半可なものじゃないはず。そう思い、元太は歩美に思わず聞いてしまった。

そう叫んだ後、元太ははっとした。歩美が、すごく困った顔をしていた。

「元太君、気づいてたんだね……」

歩美は元太に向かって、軽く微笑んだ。

「いいの。もう、コナン君のことはふっ切る。私は、自分で新しい恋を見つけるから」

そう言ったときの歩美の顔があまりにも神秘的で、元太はいまでもその顔が強く印象に残っている。

「……哀、素直になれるかな……」

歩美がポツリと呟く。

「大丈夫だって。お前の親友なんだろう？」

元太がそういうと、歩美は笑って「そうだね」と頷いた。

・
・
・

「私も、好き」

しばらくの沈黙ののち、哀はその六文字の言葉を発した。

すると、目の前にあるコナンの顔がみるみる紅く染まっていく。

「灰原」

嬉しい、と言いながら、コナンは哀に抱きつく。

「ちよ、ちよっと……」

いつも口では皮肉ばかり言う哀も、今回は顔を見ると嬉しそうだ。

「俺、今世界で一番幸せかも」

「あなたは二番目よ」

哀のその言葉に、コナンは「え？」と首を傾げる。

「私が、今世界で一番幸せよ」

「哀」

「コナンが、哀の名前を呼ぶ。その声に、哀はコナンを真っ直ぐ見つめた。」

「なに？」

「改めて、俺と付き合ってください」

彼は、どこまでも真っ直ぐだ、と哀は思った。そんなコナンの姿に、哀はにっこりと微笑んだ。

「よろこんで。これからもよろしくね、江戸川君」

そうして二人で笑い合った。

「素直に気持ちを伝えてくれて、ありがとな」

「……どういう意味？」

二人で笑い合った後、コナンが発した言葉に哀が聞き返すと、コナンは不敵に笑った。「ふふん」と鼻で笑われた気がする。

「俺、気づいてたよ、お前の気持ち。お前が俺のこと好きってことも、蘭や歩美のことがどうしても気になって、俺の告白を素直に受けようとしないうってこともわかってた」

哀は昔から、コナンは恋愛方面に疎いと思っていた。だが、哀の

気持ちはコナンに読み取られていたらしい。

「 知ってたの……」

「ああ……。でも、なんで俺に素直に気持ちを伝える気になっ
たんだ？」

「ああ、それは」

哀は昨日の夜のできごとを語り始めた。

「昨日、歩美に言われたからよ。『哀、素直になって』って」

No.13 返事(後書き)

Rukaです。

灰原サンと江戸川サン、ようやく付き合えましたね
よかったです

次回もよろしくお願いします。

No.14 電話(前書き)

前半、灰原さん視点です。

ふとりビングの時計を見ると、すでに二十二時をまわっていた。いつの間に時間がこんなに経っていたのだろう。無心とは怖いものだ。

私は、もう遅い時刻になったのでお風呂に入ろうと思い、読みかけの雑誌を閉じて風呂場に行こうとした。

そのとき、阿笠邸の電話が鳴った。

こんな時間に……誰かしら、と思いながら私は受話器をとった。

「もしもし……」

いつもどおりの声で電話に出る。よく女性が電話に出るときに使う、あの高い声はどうも苦手だ。あの声は、自分は出せないし、人があの声を出しているのを聞くのも億劫だ。

『あ、もしもし歩美だけど……。えっと……、もしかして哀???』

「ええ、そうだけど」

風呂場に行こうとしてたときにちょうど電話が鳴ったので、私は若干不機嫌だったが、親友あゆみからの電話ということで、少しイライラ

が収まった。

『うわー、哀つて、やっぱり声大人っぽいね！ 歩美もそんな風に電話に出られたらいいな』

「……………そう?」

『うん、そう！ ところで、今なにしてた?』

なぜイキナリ話がそこにいくのか。私は不思議に思ったが、正直に答えた。

「……………別に、雑誌読んでお風呂に入ろうとしてただけだけど?」

『えー!? ダメだよ、哀！ 風邪を引いてるときは、お風呂に入っちゃいけないの!』

歩美がぶんぶんと怒り出す。

「え……………そう、なの?」

私は組織で暮らしていたため、そういう類のことはあまり知らなかった。

私が「でもそんなに酷い風邪じゃないし……………」という前に、電話越しで歩美に「今日はお風呂ダメだからね!」と釘を刺されたので、彼女の言ったことに従うことにした。

『ところでさ、コナン君、今日哀に告白したでしょ?』

いきなり歩美の口から出た言葉に、私は驚愕した。

「!!! 　なんでそれを？　江戸川君が言ってたの!？」

『うつん。私の勘。そっか、やっぱり告白したんだ　』

歩美のその言葉の裏に、どこか寂しげなものが感じられて、私は少し慌てた。

「あ、でも私は、江戸川君の告白受けるつもりはないから、安心して……！」

『　哀！　コナン君の気持ちをそんな風にして扱わないで！　大切に！　私は、コナン君も哀も好きだから、二人が両思いなんだったら応援するよ！』

電話越しでも、歩美が涙声なのが伝わってきた。

電話の向こう側で、歩美が泣いている。それは、私が江戸川君の告白を断ると言ったからか。それとも、江戸川君が私に告白して、失恋したと思ったからか。

どちらにしる、私と江戸川君が歩美に辛い思いをさせているということは確かだ。

「……………」

私が沈黙を貫いていると、歩美が明るい声で言った。

『　素直になってよ、哀！　コナン君も私も、哀が素直になるの

を望んでるんだから!』

歩美が無理をしているというのは、すぐにわかった。でも、自分よりも小さい女の子に慰められていると思うと、私はなんだか不思議な気がして、おかしくて笑ってしまった。

「……わかったわ」

私が少し笑いを含ませた声で言うと、歩美も少し笑った。

・
・
・

「歩美、か……。哀、お前いい友だち持ったな」

哀から昨夜のできごとを聞いたコナンは、哀が話をしている間に、どこかから引っ張り出してきたであろう冷却ジェルシートを渡した。

「そうね……。私、歩美に昨日あの言葉を言ってもらってなかったら、江戸川君の告白、受けずにいたと思う……」

冷却ジェルシートをコナンから受け取った哀は、それを自分の額に貼ろうとする。しかし、額というのは自分からは見えないところにある。哀の近くに鏡はなく、額の様子が見えない。哀がかなり四苦八苦している。

「……ったく、しょうがねえなあ」

哀の様子を見かねたコナンが、彼女の近くに歩み寄ってきた。

「え？」

コナンは、哀の額に冷却ジェルシートを貼った。哀は、コナンの突然の行為に驚く。そして、コナンと自分とのあまりの顔の近さに、哀の顔が赤くなる。

コナンがそんな哀の様子を見て「こいつもけっこうかわいいところあるんだな……」と思ったのは、彼女には絶対に言えない。

「正直ね、さっきまで　本当についさっきまで、あなたの告白断ろうと思ってたの」

コナンとの顔の距離の近さを紛らわすためか、哀が急にそんなことを言った。

「え？」

「あなたが来る前も、絶対に告白は断ろうと思ってた心に決めてた」
軽く微笑みながら語る哀だが、その瞳からは本当にさきほどまで断ろうとしていたことが伺えた。

「でも、　歩美の声が、頭の中で聞こえてね。そしたら『私、嘘ついちゃいけないんだ。素直にならなきゃ』って思ったの」

「哀……」

コナンは哀の名を呟きながら、彼女の手に自分の手を重ねる。

「ほんと、素直になってくれてサンキューな」

コナンは、そのまま哀を自分のほっぺにぐっと引き寄せ、唇をふさいだ。

No.14 電話（後書き）

Rukaです。

歩美ちゃん……いい子ですな

やっぱりコ哀にするには彼女の活躍&協力が必要不可欠ですね！

冷却ジェルシートって、貼りにくいですね。

私、あれ貼るの苦手なんです……。

次回もよろしくお願いします。

No.15 いつもの光景

朝、コナンが工藤邸を出ると、ちょうど哀も阿笠邸から出てくる
ところだった。

……
いつもの光景。

「あら、江戸川君。おはよう」

「……はよ」

最近、示し合わせてもいないのに、家を出るタイミングが哀とピ
ツタリ合う。

「相変わらず、眠そうね」

「あ？ おめえに言われたくねえよ」

「どうせ、夜遅くまで推理小説でも読んでたんじゃ？ 新名
香保里の『探偵左文字File45 罪人たちの喘ぎ声（上）』っ
てところかしら？」

え？ とコナンが驚いた顔をする。

「なんでわかったんだ？」

「昨日発売日だったから」

「それだけで？」

「それだけよ」

哀は、本当にそれだけでわかったのかよ？ と本気で驚くコナンを見た。

本当は、それだけではないのだが。

「あなたの嬉しそうな顔を見れば、すぐわかるわよ」

「……流石、俺の彼女だな」

「……バカ」

そんなことを話しながら歩いてみると、あっという間に歩美たちとの待ち合わせ場所に着いた。

「哀！ コナン君！ おはよっ！！」

「おはよう、歩美」

「はよ」

朝テンションの低めなコナンと哀と違い、歩美はいつもハイテンションだ。

「あ、ねえねえ哀、コナン君からパーティのこと聞いた？」

「ええ、聞いたわよ。今度の日曜日でしょ？」

「あ、その予定だったんだけど、光彦君も誘ったら、その日は塾があつて行けないって言つて。で、『いつなら大丈夫なの？』って訊いたら、『五月四日のゴールデンウィークなら大丈夫だと思います』って。だから、五月四日に変更していいかな？」

「円谷君も大変ね……。私はいいけど」

「コナン君は？」

「俺も大丈夫だぜ」

「よし、じゃあ決まりだね！二人ともありがと！光彦君にもそう伝えておくれ！」

それからしばらくして元太が到着し、四人で学校へ向かった。

・
・
・

「ゴメン灰原さん、ちよつといいかな？」

三時間目終了後の十分休み、哀はクラスの女子に声をかけられた。けっこう顔のかわいい、おおたけゆい大竹唯という子だった。

「いいわよ」

少しの間考えたが、哀は唯に了解の返事を出し、一緒に屋上に向

かった。

屋上に出ると、風が強く吹いていた。そういえば台風九号が東京にも近付いてきていると今朝テレビでやっていたような気がする。

（ 帰り、ちょうど風雨が強いときにならなければいいけど）

哀はそう思いながら空を見上げる。薄い灰色の雲がもくもくと出ている。風がより一層強く吹き、哀の綺麗な茶色の髪がなびく。

「 灰原さんって、最近ちょっと調子にのってるらしいね」

教室を出てからずっと無言だった唯が、ここではじめて口を開いた。

「は？」

哀は不機嫌そうに返事を返す。哀のその態度にムツとしたのか、唯が先ほどよりも少々荒い口調で言った。

「とぼけてんじゃないわよ！ この前の体育の授業のとき、あんたがコナン君に言い寄ってるの、私たち見たんだから！」

哀は、唯の言っていることに、おかしなところがあるのに気づいた。
私・た・ち……？

「みんな、出てきて！ コイツ、痛めつけちゃおう！」

唯が声をかけると、ざっと十人ほどの女子が出てきた。みんな髪を派手な色に染め、スカートを切って短くしている。帝丹高校では

禁止されているアクセサリーも身につけていた。さらに、授業をサボっている（哀とコナンもたまにサボるが）。　いわゆる、不良というやつだ。

「唯、最近コナン君に言い寄ってるやつって、コイツのこと？」

「その髪、染めてんじやねえの??」

「付き合ってるわけでもないくせに、コナン君に纏わりついてんじやねえよ!」

女子達が口々に叫ぶ。……いや、付き合っているのだが。

哀は、少女たちの言動を見て、ここにいる女子たち全員がコナンのことを好きだとわかった。

「なに意味不明なこと言ってるの?　そんなくだらない用件だったら、教室に帰っていいかしら?」

哀が強気な態度をとると、唯たちが明らかに雰囲気硬化させた。

「なんだと?」

「やっっちゃえやっっちゃえ!」

その声を合図に、女子たちが一斉に哀に襲いかかってきた。

哀が覚悟を決めて目を瞑った、その時。

「おまえら、ここでなにしてんだよ!」

「哀！ 大丈夫？」

コナンと歩美が、屋上のドアを開け放って哀の方へ向かってきた。

「コ、コナン君……！！ どうしてここに……」

唯の慌てた様子には目もくれず、コナンと歩美は哀のところにか
けより、声をかけた。

「灰原！ 大丈夫か？」

「ええ……」

「怪我してない?? 保健室行く?」

「いえ、大丈夫よ……」

コナンが哀に手を差し伸べる。哀はその手につかまり「ちよつと、
待ちなさいよ!」「逃げてんじゃねーよ!」などと叫んでいる唯た
ちを無視して、歩美とコナンとともに屋上を出た。

「……で? これからどうするの、コナン君?」

「 そうだな。もうチャイム鳴ったから、いまから戻ると多分教
師に説教されるぜ。確か今の時間は数学。数学の担当は あの優
果とかいう教師、だな。このままサボンねえ?」

「そうね、それがいいわ」

即サボろうと決断したコナンと哀に、歩美は一人困惑した。

「えー！？ 二人とも、授業でないのー！？」

「え？ 歩美は出んのか？」

コナンは驚いた。 てっきり、歩美もサボるものだと思っていた。

歩美は小さく頷く。

「うん……。私は二人みたいに頭よくないし、出ようかな」

「そう。歩美は歩美のやりたいことをやればいいわ。サボりたくないだったら授業に出ればいいし。でも、あの優果とか言う教師には気をつけてね。じゃ、私たちは図書室にでも行ってるわ」

「おう、じゃあな、歩美」

「うん、バイバイ！ 哀、コナン君！」

こうして、コナンたちは歩美と別れた。

これから歩美の身に、どんなことが起きるのかも知らずに。

No.15 いつもの光景（後書き）

こんにちは。

評価&お気に入り登録してくださった方、どうもありがとうございます

います
灰原サンと江戸川サン、家を出るタイミングがピッタリ合うなんて……

流石、運命共同体

次回もよろしく願います。

歩美がコナンたちと別れて教室に入っていくと、生徒と優果がドアの開いた音を聞いて一斉に振り返った。

目立たないように、前のドアからではなく後のドアから入ったが、どうやらどちらから入っても同じだったようだ。ドアを開けるときのガラガラという音で、みんなが気づく。しかも、休み時間ではない、授業中という静かな時間ではなおさら目立つ。

まだ総合とか、道徳の授業であればみんなしゃべっていてそれでも目立たない方なのだが、今は数学。みんなが一番集中する授業だった。

優果が、黒板にチョークで字を書く手を止めて、歩美のほうを見た。

「吉田さん……。どうして授業に遅れたのかしら？」

表面上は微笑みかけて訊ねているが、内心は絶対にイラついているに違いない、と歩美は思った。

「えっと、ちょっとトイ」

「嘘ですね」

歩美が「トイレに行っていました」と言いきる前に、優果にあつさり嘘を見破られる。

「吉田さん、ちょっと先生とお話しましょうか」

優果は「みなさんは今度のテストに向けて自習をしてください」と残された生徒たちを振り返って言い、歩美と一緒に教室を出た。

しばらく歩き、着いた場所は一階の職員室の近くにある、滅多に使われない会議室だった。

「さて、と……。吉田さん、改めて訊くけど、あなたはなぜ授業に遅れたのかしら？」

「……………」

歩美は、哀とコナンと一緒にいたことを悟られないようにと、懸命に無言を貫く。

「言いたくないのね……。じゃあ、私があててあげましょうか。どうせ、あの灰原哀とかいういつも期末テストで満点ばかりとって、学年一位になったからって調子にのってる子と、江戸川君と一緒にだったんでしょ？」

歩美が、思わず息を呑む。その様子を見て、優果はふん、と歩美を嘲笑った。

「やっぱりね。あなたたち二人には、前々から目をつけていました。随分と問題児のようでしたからね」

確かに、哀と歩美はピアスの穴を開けたり、スカートを指定より短くしたり、部活も「用事があります」といってサボって、二人で放課後にウインドウショッピングをしたりしている。

だが、それは他の子もやっていることだ。

歩美はふと、優果の発言に気になる点を見つけた。

「……先生、あなたたち二人って、私と哀のことですか？ コナン君を入れて、三人じゃないんですか？」

「あら、江戸川君とあなたたちと一緒にすると思っただら、大間違いよ。私、彼には目をかけているんだから」

優果はぺらぺらとよくしゃべった。

「江戸川君。彼は、素晴らしいわ。生徒としても、男子としても。成績優秀、運動神経も抜群。音楽はあまり得意ではないみたいだけど、バイオリンは天才的に上手い。顔もいい。人間関係も良好。まさに、完璧だわ」

歩美は疑問に思った。優果は、歩美が他の先生や校長に告げ口するとは思わないのだろうか。

「ああ、他の人に言おうなんて考え、起こさないようにね」

優果が、歩美の考えを読んだかのように突然笑ってそう告げた。

「え？」

「あなた、江戸川君と灰原哀、それに小嶋元太と随分仲が良いらしいじゃない？　あなたが他の先生や親に、私が江戸川コナンを特別扱いしている、なんて言ったら……私、あの二人に何かするかもしれないわよ？」

「なにか、って？　なんですか？」

歩美が、顎を震わせながら問う。

「そうね。……たとえば、小嶋元太」

優果の口から出た「小嶋元太」の名に、歩美は一瞬肩を震わせた。

「彼、体育の成績は素晴らしいけど、それ以外はさっぱりでしょ？　この前、七組の担任の細川先生に聞いたはなしだと、小嶋元太は推薦で米花大学狙ってるらしいじゃない。まあたしかに、あそこは体育系に力を入れているから、小嶋元太なら学力がなくてもギリギリいけると思うわ……」

いくら元太の担任に訊いたといっても、なぜ優果はそんなことまで知っているのだろう。歩美だって、つい最近知ったばかりなのに。

大体、違う組の元太と歩美たちが仲がいいというのも、入学してまだ一ヶ月も経っていないのに把握するのはほぼ不可能だ。

なのに、なぜ優果は。

「でも、あなたが他の先生に告げ口なんかしたら、ねえ？　私、教師なのよ。教師って、生徒の調書とか、いろいろ書かなきゃいけない

いの。私が細川先生に、『元太君、最近私の授業をサボりがちで…』なんていつたら、ギリギリ合格できたかもしれない米花大学も、受からなくなっちゃうかもねえ？」

将来柔道選手を目指している元太は、大学でさらに力をつけるつもりだと、歩美に笑顔で話していた。

優果は、元太のその夢を妨げるといつのだ。

「そんな…酷い」

「大切な親友の夢を打ち砕きたくなければ、これから私のいうことに従ってもらおうかしら？」

優果は、歩美の目を見てにつこりと微笑んだ。

「わか、りました。でも、元太君には、手を出さないで」

歩美は、彼女の出す条件に従うしかなかった。

優果が条件をいくつか出したところで、授業終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

「あら、もう時間なのね」

「じゃあ、吉田さん、いまの条件忘れないでね」

優果は、クラスの男子生徒のほとんどが見惚れてしまうような笑みを残して、二階にある一年教室へもどっていった。

No.16 呼び出し(後書き)

Rukaです。

歩美、ガンバ!

優果に負けるな〜!!

最近、小説ばつかかいてるので、夏休みの課題とかいう存在のものが全然進んでません……。そろそろヤバイと思われます。

感想、評価等待着ってます

「はい、みなさん、やめてください！　じゃあ日直の人、号令お願いします」

歩美が教室に入り、自分の席に着いたタイミングで、優果が自習をしていた生徒に声をかけた。

優果は、教室に入るといつもの態度に戻っていた。さつき、歩美を脅していた人と同じ人物とは思えない、見事な切り替えっぷりだ。

日直が号令をかけ、三時間目終了の挨拶が終わったところで、歩美はみんなが不審そうに自分のことを見ている視線を振り切って、急いで教室から抜け出した。

これ以上優果と同じ空間にいるなんて、耐えられない。「歩美、どこ行くの？」とクラスメイトの伊藤有咲いとうありさが訊ねる声が聞こえたが、もう無視だ。

歩美は走って、教室から大分離れたところまで来ると、大きく息を吐いて立ち止まった。

（　　） どうしよう……。コナン君に相談したほうがいいのか……。でも、告げ口すると、元太君が……。　　）

歩美は、恐怖で顔を強張らせた。

「あれ、歩美じゃん。お前、ちゃんと教室戻れたか？」

そのとき、歩美は、ちょうど階段で図書室から降りてきたコナンと哀と鉢合わせた。どうやら、混乱してがむしやらに走っているうちに、三階の図書室へと続く階段の踊場に出たらしい。

「え、あ、うん……。ちょっと先生に怒られちゃったけど、なんとか大丈夫だったよ……」

珍しく覇気のない歩美の声に、哀とコナンは不審がる。

「どうしたの歩美？　なんだが、元気がないみたいだけど……」

哀が、歩美の顔を覗き込む。

「あ、ちょっと風邪気味で……。でも、熱ないし、大丈夫だから。頭が痛いだけ。心配しないで。私今日早退するね。先生にもそう言っておいて……」

歩美は、早口で焦ったように告げると、スクール鞆も持たずに玄関の方へ走って行ってしまった。

「歩美……！」

コナンが叫んだが、歩美は立ち止まらなかった。

「歩美、どうかしたのかしら……」

「様子、変だよな？」

残されたコナンと哀は、自分たちと別れた後に歩美の身に遭った
できごとなど、知る由もなかった。

・
・
・

(あれって……歩美、だよな?)

元太が気づいたのは、三時間目と四時間目の授業の間の十分休み
のとき。窓側の席の友だちの上原高志と、くだらないおしゃべりを
していて、ふっと外に目をやったときだった。

(　　なんか、様子がおかしいな……)

どこか落ち着かない様子で、歩美が校門を目指して走っていた。

「……ワリ、高志。俺ちょっと気分悪いから早退するわ」

「え？　おい。俺には、お前全然気分悪そうに見えないんですけど
!?!」

高志の指摘を受け、元太は少し考えたあと咳を二、三回した。さ
らに「痛い」と言いながら腹を抑えてみる。

「……お前、それはそれでわかりやすすぎ」

「う」

見事に高志に仮病だということがバレた。

「でもまあ、いいよ。先生には『元太君が具合悪そうにしてましたー!』って言っとくから」

「まじ!? サンキュ、高志!」

高志が「おう」と返事を返したときには、教室にすでに元太の姿はなかった。一人になった高志は、自分の机に腰掛けた。

「……ていうか、次の授業数学じゃん。元太数学苦手なのに、受けなくて大丈夫なのかよ……」

高志がボソツと最後に呟いた一言は、誰にも聞かれることはなかった。

・
・
・

「歩美!」

校門を出てからしばらく歩いたところで、自分の名前を呼ぶ声に歩美が振り返ると、息を切らした元太が後ろに立っていた。

「げ、元太君!? どうしたの? 今授業中だよ!？」

「それはこっちの台詞だよ。歩美、お前こんな時間にどうしたんだよ……。もう四時間目始まってるぞ?」

「あ、うん。私はいいの。今日は具合悪いから、早退する。クラスの子にもそう伝えて来たし」

「……具合悪いやつが、普通走るか？」

元太は、ここ数年でもものすごく伸びた背をかがめて歩美の顔のところに合わせ、彼女の顔色を見る。

「わ、私が走ってるの、見てたの!？」

「おう。どーかしたのか？　なんかあった？」

「な、なにもないと思うけど……」

「嘘だろ。なんか悩みでもあんじゃねーのか？」

元太が、本気で心配そうな顔をする。

「……こじじゃ話せない。学校から離れたところで、ね？」

歩美は、悩みを打ち明ることを決心した。

・
・
・

「せんせー！　小嶋元太、気分悪くて早退したそうですー！」

高志が、数学の授業をするために教室に入ってきた優果に、大き

な声で告げる。

「上原君、それホント？」

優果が、鋭い目つきで高志を見つめる。もう半ば睨みつけているような感じだ。

「え……どういことですか？」

「小嶋くん、ホントに具合悪そうにしてたの？ 仮病なんじゃないの？」

「いや、気分悪いって言って、腹押さえて咳もしてましたけど？」

自分は嘘を見破ったり、ついたりするのが結構上手い、と高志は思っていた。

「嘘ですね」

自分の部屋の障子を破いてしまったとき「風が強くて、破けちゃったんだよね」といって親を誤魔化せた高志だが、優果の前では嘘が見破られた。

「……違いますよ。何を根拠に？ 先生は、生徒を疑うんですか？」

高志と優果の言い合いに、クラスメイトたちがおしゃべりしていつるさかった教室も、次第に静まっていく。

「もういいです。では、号令お願いします」

教室中が気まずい雰囲気の中で、数学の授業が始まった。

こんにちは。

高志君が言っていた、「風が強くて障子が破れちゃったよ。あはは」というのは、私が実際に親に言ったことがあるのを使わせていただきました。

私のお母さん、コロツと騙されましたよ

次回もよろしく願います。

元太と歩美は、学校から少し離れた帝丹公園に来ていた。二人でベンチに腰掛ける。

公園には、近くの保育園から遊びに来ている園児や、先生、保護者などがいて、歩美たちの方を凝視していた。こんな時間帯に高校生が公園にいるのだから、無理もない。

「あのね、元太君。……実は私、今日三時間目の数学を、最初の方ちょっとでないでサボってて」

「お前が？」

歩美が授業をサボったというところに、元太は多少驚いたようだ。歩美は中学生のとき、一回も授業をサボっていなかったので、教師の信頼も結構あった。

「うん。コナン君と哀と一緒に、ちよつと屋上に行ったの。で、気づいたらちよつと時間が過ぎちゃってて。コナン君と哀はめんどくさいからもう三時間目はサボっちゃうって言ったの。でも、私は二人みたいに頭良くないでしょ？ だから、授業に出ようと思つて、三時間目の途中から教室に行ったの」

哀が大竹唯に暴力をされそうになったところは、なんとなく言わない方がいいと思い、省いた。元太は、歩美の会話を相づちをうち

ながら聞いている。

「学校の教室のドアって、結構みんなたてつけ悪いでしょ？ 私、目立たないように後ろのドアから入ったんだけど、『ガラガラ』って音がして、みんな振り向いちゃったの。当然、先生も。その時間は数学の授業だったから、久住優果っていう、私たちのクラスの担任の先生の授業だったの。『吉田さん、いままでどこ行ってたんですか？』って訊かれて、私『トイレに行っていました』って嘘ついたよ。でも、なんでかわからないけどあの人に嘘って見抜かれちゃって」

あのとときの優果の目の鋭さを思い出して、歩美は身震いした。人にあんな目を向けられたのは、初めてだ。

「その後、先生と一緒に会議室に行ったの。あの人に『どこに行ってたの？』って訊かれたけど、私はずっと黙秘してた。でもそれから先生が『あなたが何をしてたのか、あててあげましょうか？』って言うてきて。私、ホントに何もしゃべってないの。何にも言っていないのに、コナン君と哀と一緒にいたこと当てられちゃったの」

元太が目を見開いた。そんな読心術みたいなことをできる人がこの世にいるのか。

「びっくりしたよ、私。だって、自分の行動が全部あの人に知られちゃったんだもん。そうしたら、あの人、いきなりペラペラしゃべりだしたの。コナン君のこと結構気に入ってるとか、私と哀のことが気に入らないとか。私、不思議に思ったよ。『この人、こんなにしゃべって、私が親や他の先生方に言っちゃうと思わないのかな？』って。でもそうしたら、またあの人がある人の心を読んだみたいに『他の人に言おうなんて思わないことね』って言いはじめたの。このこ

とを誰かに告げ口したら、……大変なことになりますよ、って」

あの人元太の将来の夢を妨げようとしていることは、言えなかった。言ったら絶対元太は「俺のことなんて気にしないで親に言っちゃえよ!」と言っに違いない。そんなことをして、元太の夢を妨げたくなかった。

「そっか……お前も大変だな」

「……うん」

「俺、なんにもできないけどさ、またあの優果とかいう教師になんかされたら、また俺に言えよ」

「うん……」

歩美の頭をなでている元太の手が大きくて、妙に安心感があった。

「行くっぜ。俺、歩美の家まで送るからよ」

「うん……」

元太の優しさに、歩美はただただ頷くことしかできなかった。

・
・
・

「起立! これで四時間目の授業を終わります。礼!」

「ありがとうございます〜！」

日直が号令をかけ、四時間目の授業が終わる。授業の挨拶をきちんとしている生徒なんて、ごく僅かだ。日直と一部の生徒以外は、声を出さずにボーッと立っているだけか、もっと悪ければ立たずにいる生徒も中にはいる。

哀とコナンは、三時間目だけではなく四時間目の授業もサボった。四時間目の間に、さっきどこかへ走り去っていったしまった歩美を探していたのだ。

「哀、いたか？」

「いいえ。そつちもいなかったのね」

「ああ……」

コナンと哀が困り果てていると、歩美と同じテニス部の有咲ありさがやってきた。

「もしかして江戸川君と灰原さん、歩美のこと探してるの？」

「ああ、そうだけど……」

コナンが、有咲の言葉に頷く。

「歩美なら、さっきの十分休みにすごい速さで教室から飛び出して行ったよ」

「ええ、それは知ってるわ。私たち、三時間目の数学の授業、図書

室に行つててサボつたのよ。それで、四時間目は授業に出ようと思つて階段下りてたら、歩美に会つたわ。そのとき、なんか歩美の様子が変だつたから」

「あ、私も変だと思つたんだよ。なんか、先生に呼び出されて、帰つてきたと思つたらいきなり教室から出て行くし……」

「え？ 誰が先生に呼び出されたつて？」

コナンが有咲の言葉に驚く。

「歩美。歩美も三時間目の数学の授業、最初の方サボつててさ。それで、先生に説教されてたつぽいんだよね。まあ、私も詳しくは知らないんだけど」

「……伊藤さん、あなた、歩美の様子いつから変だつた覚えてる？」

哀が、有咲から出る情報を一言も漏らさないようにと慎重に聞く。

「うーん、三時間目の途中から授業にきたんだけど、そのときは普通だったような気がする。先生に呼び出しくらつて、帰ってきてから様子がおかしかつたかも……」

有咲の言う「先生に呼び出されて、帰ってきてから様子がおかしかつた」というのが本当なら、歩美の様子がおかしくなった原因は、まず優果にあると見て間違いなさそうだった。

「そつか。サンキュ、伊藤！」

「ありがとね、伊藤さん」

一人は有咲からの情報をしっかりと頭に入れると、教室を出て行った。

No.18 公園で（後書き）

こんにちは。

Rukaです。

最近コ哀要素が少ないような……???
優果サンと歩美ばっか出てますね。

次回もよろしくお願いします。

「失礼します。一年六組の江戸川です」

「……同じく、六組の灰原です」

昼休みで、みんなは弁当を食べている時間だというのに教室から出て行ったコナンと哀が向かった場所は、職員室だった。

「久住先生に用があつて来ました」

名前を呼ばれた優果は、コナンと哀の姿を見るとにっこり笑った。

「あら、二人とも。どうしたの？ 今はお弁当の時間でしょう？ 時間なくなるけど、食べなくていいの？」

「ええ。今すぐ、先生とどうしても話さなければいけないことがあるので」

哀が優果の目をまっすぐ見る。哀と目があつた優果は、ふっと笑った。

「そう。じゃあ、会議室にでも行きましょうか」

優果の言葉に、三人は連れ立って会議室に向かった。

会議室は、会議に使われることが目的なだけあって、椅子や机が結構たくさんある。哀とコナン、優果はそのたくさんの椅子のうち、一番ドアに近いところにあった椅子二つに腰掛けた。

「さて、と……話って何かしら？」

「歩美のことです」

哀は親友のこととなると、ものすごく気が強くなる。不気味な笑みをもらしている優果に少しもひるまずにズバツと言った。

「ああ、やっぱりね……。そのこと」

「はい。まず、あなたは歩美に何を言ったんですか？ 彼女、三時間目と四時間目の間の休み時間のときに、帰ってしまったらしいんですけど」

哀のその問いに、優果は笑った。

「そう、帰ってしまったらしいわね……。でも、それは私と関係ないんじゃないかしら？」

「関係大有りです。歩美と仲のいい子が、三時間目の数学のときにあなたと歩美が二人でどこかに行った後から歩美の様子が変になったと言っていました」

「それは、その子の勘違いなんじゃない？ その程度で理由で私のせいにされちゃ困るわ」

哀は納得いかないという顔をしたが、コナンは優果の言うことが

少し理解できた。 たしかに、それだけでは、理由として足りない。

「……じゃあ先生。三時間目の途中で、彼女と一緒にどこかへ行ったらいいですね。どこへ行って、何を話していたんですか？」

「流石、江戸川君。いいとこついてくるわね。でも、そんな大層なことは話してないわ。私は彼女を会議室に連れて来て、授業の最初の方をサポートしたこと、注意しただけよ」

コナンと哀が優果をじっと見る。もし優果が言っていることが本当なのであれば、彼女のとった行動は「生徒の教育」以外なものでもない。

だが、もし違っているのなら。

「じゃあ、話はこんなところでいいかしら？ 私も忙しいし」

「ごめんなさいね、と謝りながら席を立つ優果を、哀が怒りのこもった目で睨みつけた。

「今日の放課後、歩美の家に行ってきます。歩美に、本当に先生にサボリのことを注意されただけなのか、聞いてきます」

もし先生が言っていたことが嘘だったら大問題ですね、なんていう哀にも全く臆さずに、優果は綺麗に笑った。今まで見た中で、一番綺麗な笑みだ。

「どうぞ、ご自由に。でも、もし私が吉田さんに注意する以外のことをしていたとしても、それを彼女が素直にあなたたちに相談する

「思ったたら、大間違いよ」

「大丈夫です。私も江戸川君も、歩美を信じてますから」

哀は素早く身を翻し、すでに席を立っていた優果よりも先に会議室を出て行った。コナンも慌ててあとに続こうとした、そのとき。

「……え？」

コナンの耳元で、すごく小さな声で優果が何か囁いた。

「先生、今なにを」

「ちゃんと聞こえてるはずよ。私、待ってるわ」

コナンがもう一度聞き返そうとした、そのとき。

「江戸川君！ さっさと教室に戻るわよ！！」

廊下から、先に出て行った哀の声が聞こえた。

「あ、わりい！ 今行くから！」

コナンは優果を少し振り返り、会議室を出て行った。

一人残された優果は、その口許に不気味な笑みを浮かべていた。

「まったく、あの教師、ホントなんなのよ！？ ナニサマのつ

もりよ!? 『それは、その子の勘違いなんじゃない? そんな程度の理由で私のせいにされちゃ困るわ』って、理由は理由でしょ! ? これも立派な理由! なのに、なんであんな変な教師にごちゃごちゃ言われなきゃいけないの! ? 』

なんか哀のキャラが微妙にずれている、とコナン(とRuka)は若干思ったが、この際つっこまなかった。

たしかに哀の言うとおりだとコナンは思った。だが、頭で冷静に考えると、やはりさっきの理由だけでは足りない。

「とにかく、今日歩美の家に行っってはつきりさせるわよ。江戸川君、今日はいくら一年生にしてサッカー部のエース候補と言われているあなたにも、部活サボってもらうから」

「…………マジっすか、灰原サン」

「あのクソ優果の言ったことが嘘だったら、どうしてくれようかしら。ああ、そういえば、ちょうどこの前新薬ができたのよね。名づけて『即効!! ビリビリ薬!!』。普通は長時間正座してないと足はしびれないけど、この薬を飲むと三十秒間正座しただけですぐにしびれてしまうという薬品よ。本当は江戸川君で試そうと思っただけけど、あのクソ教師で試すのもいいかもしれないわ」

コナンは恐怖で震えた。コ、コイツ、俺で試すつもりだったのかよ! ?

「とにかく、今は歩美よ。終学活が終わったら、すぐに歩美の家まで行きましょ」

さっきまでキャラを変えてグチグチ言っていた哀が、いつもの調子に戻る。

「ああ」

コナンは返事をする、哀と一緒に教室へ戻って行った。

No.19

職員室（後書き）

こんにちは

なんか後半の灰原サンのキャラが崩れとる……!!
やっぱり歩美ちゃんが絡むと性格変わりますね。

読んでくださってありがとうございます。
評価待ってます

「お邪魔します。歩美、いる？」

放課後、部活の顧問に「今日は用事があったて……すみません」といって部活をサボったコナンと哀は、歩美の家に行っていた。

玄関のチャイムを鳴らして歩美を呼ぶ。奥のほうからガサガサと人の気配がし、部屋から人が出てくる。

「あれ？ 灰原とコナン？」

登場したのは、歩美でも彼女の母親でもなく、なんでか元太だった。

「え？ 小嶋くん？」

「はあ！？ 元太！？ なんでお前ここにいるんだよ？ 部活は？」

「ん、ああ、サボリ。っていうか、俺四時間目が始まる前に早退したけど」

元太の言葉に、哀が珍しく質問した。

「え、でも。ちょっと待って。小嶋くん、あなた今までずっとここにいたの？ ……四時間目が始まる前ってことは、今日は

六限だったから、四時間以上ここにいてことよね？ そんな長時間何してたの？」

「……玄関で話すのもなんだし、とりあえずお前ら入れよ」

元太に言われてコナンと哀は歩美の家のリビングに入った。

「歩美は、いま寝てる。なんか疲れてたっばいから」

「……そう」

哀は、元太の話し振りからして歩美が無事なのを悟り、とりあえずは安心した。歩美が優果に精神的ショックを与えられていたとしたら、元太はもっと深刻そうな顔をするだろう。

「で、質問ってなんだっけ？」

「あなた、いままで歩美の家で何をしていたの？」

哀が、元太を少々キツイ目つきで見ながら（俗に言う「睨みながら」）言う。

「あのな、俺が何で学校を早退したかっていうと、歩美を見たからなんだ」

元太は、リビングの薄い青色のソファにズシッと座った。コナンと哀は「はあ？」という顔をした。歩美を、見た？

「いつ？ どうで？」

「俺、三時間目と四時間目の間の十分休みに、窓際でクラスのやつと話してたんだ。そしたら、校門のところをダッシュで走ってる歩美が見えてな。アイツがこんな時間に校外に出るなんて、絶対におかしいと思って、俺も早退して歩美のあとを追ったんだ」

元太が話している間に、コナンと哀も元太の近くの床に座る。

「追いついて、『歩美！』って名前を呼んだら、アイツ振り返ってさ。顔を見たら、泣いてはいなかったけど、思いつめた、暗い顔してた」

哀は、そのときの歩美の様子を想像し、後悔した。 自分があるときサボらずに、歩美と一緒に教室に戻っていれば。

「で、とりあえず話を聞こうと思って、二人で公園に行ったんだ。そこで、歩美から大体のことは聞いた。 歩美がお前達と一緒に屋上に行つてて、三時間目の授業が遅れたこと。教室に戻つたら、優果っていう教師に呼び出されて、会議室に行ったこと。それから、会議室で、優果がコナンを気に入ってるって知ったこと。あの優果ってやつが、灰原と歩美をよく思ってないこと。 あと、そいつに脅されたこと」

「 ちょっと、脅されたですって!？」

哀が、今までにないくらいに興奮した口調で言う。 床に座つたのに、興奮のあまり立ち上がった。いた。

「ああ。どんな内容で脅されたのかは言えないって言うってた。とに

かく、優果がコナンのことをお気に入りだとか、灰原と歩美のことが嫌いだとか、そういうことを他の教師や親に告げ口したら、まずいことになるらしい」

「そんなの無視すればいいのよ！ あんな教師が言ったこと！」

「いや、それは駄目だ」

興奮する哀と元太に、落ち着き払った声でコナンが告げる。

「どうして？ なんでよ、江戸川君」

「脅された内容がどんなものかわからない今の現状では、こちらが不利になる可能性が高い。例えば、誰かを殺す、とか。あの先生を捕らえたとき、ナイフを持っていたら刺される。人が一人死ぬかもしれないぜ？」

「ありえないでしょう、殺人なんて」

「例えばの話だ。確かにありえないかもしれないけど、可能性は決してゼロではない」

コナンの言葉に、哀は唇を噛みしめた。どうやら、しぶしぶでも納得したようだ。

「……江戸川君、下手に告げ口したり捕らえたりするのが得策じゃないことはわかったわ。でも、じゃあどうすればいいの??」

哀が珍しくヤケクソになってコナンに訊ねる。

「とりあえず、今は歩美に脅された内容を聞くのが先決だ」

そういつて、コナンが床から立ち上がった。それを見た元太はぎよっとした。

「おい灰原、歩美の部屋ってこっちだよな？」

「ええ、そうよ」

「俺、ちょっと歩美と話してくるわ。お前らはここに残っ」

「あ、コナンちょっと待て！」

元太は慌ててコナンの行く手を遮った。今歩美を起こされたら、俺が気まずい！

「なんだよ元太」

「歩美、ホント疲れてんだって！頼む、聞くのは明日で！」

何度も頼み込む元太に、コナンはあっさり引いた。

「あ、そうなのか？ 悪かったな……。じゃ、明日にするわ」

「お、おう。サンキュー」

哀は、コナンに頼み込んだときの元太の顔が紅いのに気が付き、不審に思った。

「よし、じゃあもう帰るか、灰原」

「ええ、そうね」

コナンに声をかけられ、哀は荷物をまとめて出る準備をする。

「元太は？」

「あ、俺は歩美の母さんが帰ってくるまで待ってるよ」

「そっか。じゃ、気をつけて帰れよ」

「おう！」

哀は、自分の荷物をまとめ終わったようで、コナンの鞆をとって「はい」と手渡した。

「お、灰原サンキユ。じゃーなー元太！」

「さようなら、小嶋くん」

「おう！ また明日な、コナン、灰原！」

夕日がもうすぐ沈む頃、コナンと哀は歩美のマンションから出た。

元太の顔が紅かった理由がわかるのは、もう少し後になる。

「……あの人が会議室で私たちとしゃべってたときに、うふふふ気

持ち悪い笑みを浮かべてた理由がわかったわ。あの人、歩美を脅したから私たちに言うつもりがないと知っていたのよ」

歩美の家を出てしばらく歩いたところで、哀が独り言のように呟いた。

「ああ、そうだな」

「久住優果……。あの人、絶対に許せないわ」

哀は眉根を寄せて険しい顔つきで言った。

No.20 歩美と元太(後書き)

こんにちは。

Rukaです。

今回でちょうど二十話です！

わーい

これからもよろしくお願いします。

「ただいま。……って、あら、元太君じゃない」

時刻は午後七時。最近パートをはじめたという歩美の母親が帰ってきた。

「どうしたの、こんな時間に？」

「あ、歩美今日具合悪くて、学校早退してきたんです」

「あら、そうなの。もしかして、元太君が歩美を家まで送ってくれたの？」

「え、はい、まあ……」

少々歯切れ悪く言った元太だったが、歩美の母は天然なのか、全く気にした様子はない。

「そうなの。ありがとうね」

穏やかに微笑む歩美の母は、四捨五入するともう四十歳になるらしいが、そんなようには全く見えなかった。

「ああ、元太君夕ご飯食べていく？ おばさん作ってあげるわよ。」

今日はハンバーグなんだけど、好き嫌い大丈夫？」

にこにこ笑いながら「すぐ準備するから」といってキッチンへ行こうとする歩美の母を元太が呼び止めた。

「あ、結構です。俺もう帰るんで」

「えー！？ あらまあ、帰っちゃうの？ それは残念ね」

なんとなく歩美のお母さんは憎めない、と元太は思った。ちょっとコナンの母ちゃんに似てるかもしれない。

鞆を持って玄関に行く元太を、歩美の母親が見送りした。

「また歩美と遊んであげてね？」

元太は靴を履く手を止めて優果の母を振り返り「はい」と返事をした。

「じゃあ、おじゃましました」

「はいはい また来てね」

歩美の母は、愛想良く手を振って元太を送った。

元太を見送った歩美の母は、歩美の部屋にそっと入った。

「歩美、起きてる？ 具合はどう??」

「お母さん……」

布団をかぶって寝ていたように見えた歩美が、起き上がってくるりと母の方を振り向いた。

「あ、起きてた？ 起こしちゃった？」

「お母さん、帰ってきてから元太君としゃべっててうるさかったから、起きた」

歩美が心底迷惑そうな顔で告げる。

「あらそう、ごめんね」

「ホントだよ……」

「夕飯なにがいい？ あ、お粥作ろうか？」

「大丈夫……。夕飯いらないや」

歩美はそういつてまたベッドに入り込んだ。

「そう？ じゃあなんか食べたいものある？ プリンとか、アイスとか」

「うーん、得になんもないよ」

「そっか。じゃあゆっくり休んでね」

「うん」

歩美は、寝ようと思って瞼を閉じた。

「あ、そうそう」

歩美の部屋を出ようとした母が、思い出したようにふと振り返る。

「ん？」

「元太君、歩美のこと好きみたいよ？」

歩美は突然のことに思考が一瞬止まる。

「え」

思わず母を凝視する。

「もう、歩美もモテるわね」

歩美の母はふふふ、と口許におもしろそうな笑みを浮かべた。

「じゃーね」

啞然とする歩美を置いて、母は去っていった。

「お母さんに言われなくても……今日元太君に言われたから、元太君の気持ちなんて知ってたよ」

母がいなくなつて静寂に包まれた部屋で、歩美は一人呟いた。

・
・
・

「なあ歩美……」

「なに？」

元太と歩美は帝丹公園を出てから、二人で歩美の部屋にいた。歩美はベッドに寝ていて、元太は椅子に前後逆　背もたれの部分に腹、背もたれの無い前のほうに背中　で座っている。

「俺、お前に言いたいことがあるんだけど……」

「なに？　元太君」

言いにくそうに口ごもり、椅子をくるくる回転させ出した元太を、歩美が促す。

「　好きなんだ」

「は？　なにが？」

「……お前が」

「え？」

ぽかんと口を開けて元太を見る歩美に、彼は椅子の回転を止めて苦笑いする。

「俺、お前のこと好きなんだけど……」

「……!？」

歩美は絶句する。 そんなこと、全然わからなかった。

「お前、俺の気持ちなんて気づいてなかっただろ？」

「……うん」

「だよなあ。 お前、コナンしか見えてないもんな」

元太は椅子を歩美の顔が見えるようにして止めた。

「……」

「俺のことなんて、眼中にないんだもんなー」

「……そんなこと、ない、よ」

元太は歩美のほうを向いた。

「いいよ。 気使わなくて。 でも、俺の気持ちは知っというてほしかったから」

「……うん」

「返事とかは別にいいからさ。 お前はゆっくり休めよ」

「……うん」

返事をする、歩美は目を閉じた。

「おやすみ」

元太は歩美の頭をなでて呟くと、部屋を出た。

・
・
・

「唯、ちゃん？」

コナンと哀が歩美の家にいた頃、帝丹高校では、放課後時間があつたので、教室で友だちとしゃべっていた大竹唯が、担任の久住優果に呼ばれていた。

「なんですか、先生」

「ちょっと用があるんだけど。来てくれないかな？」

「……わかりました」

唯は、優果について会議室に向かう。表面上はいつもどおりの顔をしていたが、内心不安でいっぱいだった。

（もしかして、私が灰原哀を屋上に呼び出したこと、ばれた？）

江戸川コナンと吉田歩美と灰原哀が三人でチクったか。面倒

なことになった。

「で？ 先生、用って何ですか？」

「吉田歩美と灰原哀のことなんだけど」

ほら、やっぱりきた。この先生にこの前のことがばれている。

「あなたがこの前灰原哀を呼び出したことは知ってるわ」

「……………はい」

「協力、してくれない？」

「え？」

唯は拍子抜けした。 協力？

「私、灰原哀と吉田歩美のこと、嫌いなよね。だから、唯ちゃんと気が合うと思うの。どう？」

「……………」

この先生は、灰原哀と吉田歩美のことが気に入らない。私も、あの二人は嫌いだ。この先生とは、気が合うかもしれない。唯は、これはそこまで悪い話ではかもしれないと思った。

「わかりました。では、なにを協力すればいいんですか？」

「……………それは、後ほどメールで。アドレス教えてくれる？」

「はい。私のアドレスは」

こうして、放課後の会議室で怪しい取引が行われていた。

こんにちは

Rukaです。

夏休みの宿題で、読書感想文と短歌(3つ)と俳句(3つ)、美術の「夏のスケッチ」など……が終わっていないので、しばらくPCをいじらないようにしようと思います。

得に短歌……これは強敵です。

全っ然思いつきません。

あと、夏休み終わりに国語と社会と理科のテストがあるので、そのテスト勉強もしようと思ってます。

ではではしばらくさようなら。

再会(再開!)は9月中にできるようにします。

次回もよろしく願います。

「え……休む？」

歩美から学校を休むという内容の電話がかかってきたのは、朝の七時半ちょっと前。哀がもう少しで阿笠邸を出る、というタイミン
グで。

『そう。ちよつとまだ調子が良くなって……。でも、明日には多分
いけると思うから』

「……そう。お大事にね」

一瞬の沈黙の後、哀はそう返した。

『うん。ありがとう』

哀は歩美との会話が終わるとケータイを閉じた。時計を見ると、
いつも出る時間より三分ほど遅れている。

「博士、行ってきます」

「おう、気をつけていくんじやよ」

（ これじゃあ江戸川君と一緒に待ち合わせ場所まで行くのは、

無理ね……)

哀は、「今日は部活ないから、少し早めに帰ってくるわ」と博士に言いながらも、頭の中ではコナンのことばかり考えていた。

(でも、今から走っていけば途中で会えるかも)

そんな淡い期待を抱いて、急いで阿笠邸の玄関の扉を開けた。
すると。

「よう、哀」

なんでかコナンが立っていた。

「え？ あなた、なんでここに」

「おめえが来るのを待ってたんだ」

「そう、なの……ありがとう」

哀は顔を紅くする。が、それを誤魔化すように軽く咳払いをする。

「あ、歩美今日休むらしいわよ」

「そうなんだ……」

コナンと哀はお互い目を合わせる。

「やっぱり、アレの可能性高いよな」

「ええ……」

哀は目を伏せる。

「優果のせいよ、絶対」

「……まあ、多分そうだよな」

「あのクソ教師、今日こそ絶対歩美を脅したことを白状させてやるわ」

そう言った哀は、温泉に行ったときに殺人事件が起こり、コナンが女湯に入ったあの事件のときと同じような目をしていた。

・
・
・

『これから生徒朝会を始めます。朝の挨拶、榎本実咲さんえのちとみさきお願いします』

帝丹高校では、毎月二回生徒朝会というものが行われる。はじめにある朝の挨拶は生徒会書記が、司会進行は生徒会副会長が、校長の話の前にある生徒会長の話を（当然だが）生徒会長がやる。

『校長先生のお話、校長先生お願いします』

生徒会長の話は得にもなく終わり、かつぶくのいい四十代後半くらいの校長が壇上に上がる。ステージ上に上がるための階段を上るのも、腹が出ていて結構きつそうだ。

「オホン。えー、皆さんおはようございます。えー、最近、ですね、えー地域の方から、えー「帝丹高校の生徒さんは挨拶がいいですね」とよく言われます。が、えー、その一方で、えー「夜遅くにコンビニの入り口のところで屯している生徒さんを見ました」とか、えー「タバコを吸ってました」とかいうこともよく言われます。えー、」

コナンは欠伸をした。工藤新一だったころにいた、前の校長の方がよかった。話の長さはどちらも長いが、内容が前の人の方が断然おもしろかった。話し方も巧かった。

「あら、暇そうね？」

隣でくすくす、という声が聞こえてそちらを向くと、案の定予想通りの人が笑っていた。こんな人を小バカにするような笑い方ができるのは、コイツしか知らない。

「あ？ なんだよ灰原。お前はあの校長の話、聞いてて退屈じゃないのか？」

「ええ、全然退屈じゃないわ。すごく楽しい」

自分の予想に反した答えを言った哀に、コナンは驚愕した。

「はあ！？ どこがだよ！？」

「あの人、『えー』ってよく言うでしょ？ その回数を数えてたの。今、十四回言ったわ」

「……………」

哀のマニアックな(?)「楽しみ」に、コナンは返す言葉が見つからなかった。

「他にもあるわよ。あの人が文節を変なところで区切る回数とか、つっかえる回数とか」

「……人生充実シテマスネ」

「あら、褒めてくれてありがとう」

そこでコナンと哀は会話を止めた。二人の近くにいた教師がこちらを睨んでいたからだ。

『えー、ということ、今回の、えー私の話は終わります』

ながったるい話が終わり、校長が礼をすると、ごく少数の生徒も礼を返した。

『では、これからこのまま表彰にうつります』

司会進行を務めている生徒会副会長のその言葉に、体育館に集まった生徒たちは少しざわめいた。

「えー？ 今の時期に表彰？」

「珍しいな」

「部活の大会とか、作文とか絵とか、漢検とか英検とかじゃないし

……。なんだろうな？」

あちらこちらで生徒同士の話し声が聞こえる。教師たちは「静かにしないか！」などと怒鳴っていたが、コナンも不思議に思っていた。

（この時期の表彰って、なんかあったっけな？）

工藤新一の時の記憶を引っ張り出してみても、ない気がする。

体育館が再び静まったところで、校長が口を開いた。

『えー、一年五組、小嶋元太』

「え？ 俺？」

『一年六組、えー江戸川コナン、灰原哀、吉田歩美』

「??？」

元太と歩美は突然呼ばれた自分の名前に驚き、返事もせずに思わず声をあげてしまった。コナンと哀も声には出さなかったもののお互い顔を見合わせた。

『呼ばれた四人 あ、今日は吉田歩美さんは休みなんですか。じやあ三人はステージに上がってください』

「？ おい灰原、このメンバーってことはよ」

「警察がらみの可能性が高いわね」

コナンと哀はこそこそ二人で話しながらステージに上がっていく。これを歩美が見ていたら「二人とも内緒話しないの！」とかいって騒いでいただろう。

ステージ上に上がり、三人で並んで立つ。校長が礼をし、三人も礼を返す。さっきの校長の話のときは礼なんてしてなかったが、流石に全校生徒の前で校長の礼を無視するわけにはいかない。

『賞状。少年探偵団殿。あなたたちは、日頃から警察の捜査に貢献し、事件解決に重要なヒントを我々警察に』

校長の言葉を聞き、全校生徒の三人へ向ける視線が変わった。警察の捜査に貢献しているとなれば、たしかにすごい。

『よってここに賞します。平成二十四年、四月二十四日』

はい、おめでとう、と校長が賞状を差し出す。

「おい元太、お前取りにいけよ」

「え？ 俺？」

「あなた、少年探偵団の（自称）団長でしょ？」

「お、おう」

こういうときだけ団長を強調して元太を操る哀を、コナンは尊敬と恐怖の入り混じったまなざしで見つめた。

「これからもがんばってね」

マイクに入らない程度の音量で校長が言う。

「あ、はい」

元太は賞状を受け取るとまた校長と礼を合わせ、賞状を片手に哀とコナンを見た。

「やったな！ これで内申あがるかな？」

「多分ね」

「多分な」

キラキラと目を輝かせて問う元太に、哀とコナンは同時に返事をする。

「おっしゃ！ じゃあこれで米花大学の推薦有利になるな！」

「よかったな」

心から喜ぶ元太を、コナンと哀は弟を見るような気持ちで見た。

『警察の人の話によると、少年探偵団の五人はいつも事件に巻き込まれるそう。この子達の数々のヒントのおかげで事件がスムーズに解決するんだそうです』

全校生徒からどよめきがおこった。生徒だけでなく、教師たちも啞然としている。

「えーさらに、彼らは爆弾を解体したり、えー銃を持った犯人から逃げたり、車でビルからビルへ飛び移ったりと、えーさまざまなお話を体験しているそうです。えー、この数々の功績に、皆さん拍手をしてください」

拍手しない人など誰もいなかった。皆一斉に拍手をする。

「では、降壇してください」

元太は五組のところに、コナンと哀と歩美は六組のところに移動する。

六組の自分の席に着いたコナンは、周りの女子に思いつきり見つめられた。目で「すごいね!」と訴えている。同じく哀も近くの、主に男子生徒に見つめられていた。今は朝会中なので話しかけてはこないが、教室にもどつたらすごいことになりそうだ。

コナンと哀は同時に溜息をついた。

No.22 表彰（後書き）

皆様お久しぶりです。

Rukaです。

テストは無事終了しました！

理科のテストはA評価がもらえる点でした！
ほっとしました。よかったです！

国語の漢字テストもまあまあよかったです。

あ、なんかテストのことばかり書いててあとがきが長くなりそうなので、続きは活動報告のところに書いておきます！

174

今回の話も、長くなりました。

えっと、多分3000字超えています。

長いほうがいいという方にとってはよかったですかも。

短い方が読みやすいという方、ごめんなさい！

表彰はリクエストがあったので入れてみました。

ちょっと微妙かも。

シンゴさん、これでよかったですか？

次の話も九月中に投稿できたらいいなあと考えております。

読んでくださった方、ありがとうございました。

コナン、哀、歩美の三人は、予想通り朝会終了後クラスメイトに囲まれていた。

今は三時間目と四時間目の間の、十分間の休み時間。十分休みの度に同級生達が探偵団の机の周りに寄ってくる。男子は歩美や哀の席、女子はコナンの席のところを集まっていた。歩美とコナンは愛想良く話をしていたが、哀はほとんどの人を無視していた。

哀はふとコナンの席を見た。コナンの周りには十人ほどの人だけができている。

「へえ、じゃあコナン君ってあの大阪で有名な服部平次と知り合いなの〜!?!?」

「ああ。他にも怪盗KIDとか、白馬探とかとも知り合いだぜ」

「すごい!」

もともと事件の話が好きな男だ。女の子に「事件のこと、詳しく聞かせて!」と言われれば、コナンは喜んで話し出す。

「ねえコナン君、あの校長が話してた『爆弾を解体した事件』って、どんな事件?」

ポニーテールのかわいい女の子が、目を輝かせながらコナンに訊く。そのとき、四時間目の授業開始のチャイムが鳴った。

ほとんどの生徒は席に着くが、コナンのところにいるポニーテールの女子はまだ席に着こうとしない。

コナンは、彼女が先生に怒られないか少し気になった。だが、ここで自分が「チャイム鳴ったし、席に着いたほうがいいんじゃない？」なんて真面目なことを言う義務も義理もない。

「ああ、それはたぶん、東都タワーの……」

コナンが話し始めると、廊下から靴音が聞こえた。ポニーテールの女の子は、気づいていない。

「なにをしてるんですか」

前のドアを開けて教室に入ってくるなり、優果が席に座っていないポニーテールの女子生徒を目ざとく見つけた。彼女から目をそらさず、ドアを閉める。

「もうチャイムは鳴りました。席に着きなさい」

優果はコナンとしゃべっていたポニーテールの女子を軽く睨み、低い声で告げる。

「す、すみません……」

普段、哀と歩美以外の生徒には温厚な態度で接する優果だが、今回ポニーテールの女子にはなぜか哀たちと同じような態度で接した。

（　　あの子が江戸川君に近づいたから、気に入らなかったのね）
遠くからその様子を見ていた哀は、優果の不機嫌そうな顔を見て他の人に気づかれぬよう静かに笑った。

「じゃあこの問題を　江戸川君」

「はい」

優果が担当する四時間目の数学の時間も、終盤にさしかかる。指名されたコナンは席を立ち、黒板に難しい数式を書き連ねていった。

「正解です。よくできましたね」

優果はコナンに向かってにっこりと微笑んだ。昨日の歩美のことについて問いただしたことなど全く気にしていないような態度だった。

「じゃ、この問題は　灰原さん」

哀は無言で席を立ち、黒板に数式を書いたあと、また何も言葉を発さずに席に戻った。

「　はい、正解です」

コナンのときよりはいくらかトーンの低い声で告げる。　優果は、コナンのことが好きだ。

(全く、教師が生徒に恋をするなんて……)

今の教育現場はどうなっているのだ。教師と生徒の恋愛(しかも教師の一方的な)、教師の生徒への脅し。本当に信じられない世の中になったものだ。

「それじゃあ、次の数学の時間はテストをやりませう。みなさんちゃんと勉強してきてくださいな。じゃあ、号令お願いします」

いつものとおり笑顔で言う優果の顔を、コナンは凝視していた。

挨拶が終わると、優果はいつものとおり教材を持って教室を出た。

哀は、教室を出る前に優果がコナンに目配せのようなものを見たのを見た。

(何?)

哀が疑問に思っていると、コナンが教室を出ようとしていた。

(ちょっと、まさかあの人についていく気?)

怪しい。怪しすぎる。

「ちょ、江戸」

哀は、コナンを止めるため彼を追おうとした。だが、途中でコナンと目が合い、哀が口パクで「なにかあるわよ」と訴えると、コナンはそれに「わかった。でも大丈夫だから」と返した。

そうして哀から視線をはずすと、優果についていくように教室から出て行った。

（ 本当に、大丈夫なのかしら？）

哀は、優果とコナンが消えていった教室のドアを、じっと眺めていた。

No. 23 数学の授業（後書き）

Rukaです。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

10月1日に、私の好きな本の6巻が発売されます！
楽しみだ！

早速明日本屋に買いに行きます！！

次回もよろしく願います。

「あ、元太！ はよ〜！！」

「おう、高志。昨日はどーもな。ちゃんと先生まけたか？」

「なんだか高志は今日の午前中歯医者にいつてきたらしく、昼休みに登校してきた。」

「え？ あーうん、びみよー」

「びみよー？」

元太は不思議そうな顔をした。高志は、話を煙にまくことはかなり巧い。その彼が「びみよー」と言ったということは、バレたか？

「あ、もしかしてバレちった？」

「うーん、ばれた、かも？」

二人でその話の話題をしていると、周りにいた他の生徒達がわんさか寄ってきた。

「そうそう、元太が帰ったあと、あの優果って教師超怖かったんだぜ！？」

「なんか上原に向かって超言い返してたし」

「高志もそれにまた言い返すから、もう教室中が二人の言い合いに注目するわけよ」

「で、こでじやー授業はじまんねーなーってことで、無理矢理言い合いが止められて、きまずーい雰囲気の中で授業がはじまった、つーことですよ」

「超やばかったんだぜ、昨日」

クラスメイト達が口々に言う。元太がとりあえずわかったのは、昨日優果と高志が自分が早退したことについてもめて、「超やべかったー！！」ということだった。

「そうなんだ。　っていうか、お前ら前まであの優果って教師のこと『やべえあの人超いいんだけどー』って言ってなかったっけ？」

元太がそう問えば、次々に周りがしゃべりだす。

「あー。前はな。でも、今はもう無理。あのおばさんダメ。昨日の件で好感度下がりがまくり」

「そうそう、前まで『優しい・若い！・美人！！』で三拍子そろってたけど、今じゃ『ウザイ・ババア！・キモイ！！』になってるか
らな〜」

「眉間に皺寄ってたし。怒ったときの態度がまたうざいわ」

前まで高評価だったのに、一日でこんな変わるもんなのか、とか

思いながらも、元太はみんなの愚痴を聞いていた。

「元太」

「あ？」

クラスメイトがわーわー騒いでいる中に、高志の落ち着いた声が耳に入ってきた。

「なんだよ？」

「お前、六組の江戸川コナン、灰原哀、吉田歩美と仲いいだろ？」

「え？ おう、まあ。小学のときからの付き合いだし」

「気をつけたほうがいいぞ」

急に低く真剣になった高志の声に、元太は少し戸惑う。

「？」

「あの優果とか言う教師、噂によると江戸川コナンのことが好きらしい」

「……はあ？」

元太は拍子抜けした。まったく、コイツは。急に真剣そうな声出すから、どんな重要な内容かと思えば、そんなことか。

「なんだそれ？ 噂だろ、う・わ・さ！ まじに受け止めんなよ！」

「……………」

「教師が生徒に恋するなんて、ありえないだろー」なんて言っている元太に、高志はこっそり溜息をついた。

・
・
・

「灰原さん、ちょっといい？」

コナンと優果がどこかへ行ってから数分後、唯が哀に声をかけた。

「なに？」

哀は今すごく機嫌が悪いらしく、唯を思い切り睨みつけた。

「あのねー、江戸川君と優果先生、付き合ってるらしいよ」

「あ、そう」

哀の素っ気ない反応に、唯は不満そうな顔をした。

「なに、驚かないの？」

「別に」

哀の飄々とした態度に、唯はムキになった。

「な、なんなら証拠を」

「大竹さん」

気持ちが高ぶって声が上がると唯とは反対に、哀が冷静な声で告げた。

「あなた、誰に『優果とコナンが付き合っている』って言えって言われたのかしら？」

哀の鋭い一言に、唯はぐっと詰まる。

「そ、それは……」

「優果にでしょ？」

哀的を射抜いた一言に、唯は思わずわかりやすくハッと反応してしまう。

「その様子だと、当たりのようね」

「……………」

哀は、無言のまま立っている唯のポケットからスッとケータイを抜き取った。

「中、見るわよ」

「……………」

無反応な唯を放って、哀はケータイを開いた。すると。

「……………ロック、ね」

哀の手が止まる。 ロック。

「ど、どう？ ロックがかかっていると中が見れないでしょ？」

哀がロックを見て困っている様子を見ると、唯は勝ち誇ったように笑った。

だが哀の困った顔も一瞬で終わると、何かの文字を入力し始めた。

「 あの人の誕生日は、と」

「……………？」

唯のケータイのパスワードは四桁の数字を入れるようになっていた。四桁の数字といえば、だいたい自分の誕生日 もしくは好きな人の誕生日 を入れるはず。

唯はコナンのことが好き。となるとここに入る数字は 。

「0504……………」

哀は、口に出しながら文字を入力した。

（ ） って、いまどき誕生日をパスワードに設定するわけが （

哀は自分で入力した数字に呆れながら、ケータイのパスワード認証画面で、決定ボタンを押した。

「……………え？ 嘘」

決定ボタンを押すと、パスワードが解除された。暗証番号が、当たっていたのだ。

「……………」

唯は俯き、悔しそうな顔をする。哀は顔には出さなかったが、内心「いくらなんでもわかりやすすぎるでしょ」と呆れ果てた。

No. 24 Password (後書き)

お久しぶりです。

最近まゆ毛が抜けて困っているRukaです。

今回は、サブタイトルを英語表記にしてみました！
なんか、かつこよくないですか？？

内容は、題名のとおりパスワードについてです。

最後まで読んでくださった方、ありがとうございました。
次回もよろしく願いします。

哀が暗証番号を入力している、ちょうどその頃。

コナンと優果は、三階の図書室に来ていた。昼休みなどは大勢の生徒が訪れ、放課後もぼちぼち人が来るが、それ以外は静かなものである。

優果はその静かな空間の中で口を開いた。

「江戸川君、私が昨日言ったこと覚えててくれたのね。嬉しいわ」

「先生、僕に何の用ですか？」

昨日、コナンが哀と職員室に乗り込んで優果を問いつめた後、コナンは優果に「この紙に書いてある時刻にこの場所に来て」と言われていた。工藤邸に帰ってからコナンが制服のズボンのポケットを探ると、メモ用紙のような紙に「明日の数学終了後、図書室で」と書いてあった。

「まあ、そんなに焦らないで。ちょっとお話でもしましょう」

優果は不気味に笑うとコナンに近付いてきた。

「ねえ、江戸川君、二人っきりの時はコナンでいいかしら？」

「……………。どござ、自由」

コナンがそう返事をすれば、優果は嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ、コナンも私のこと『優果』って呼んでね？」

優果がにっこり笑う。この笑みを向けられたのがコナン以外の男子だったら、みんな騙されてしまいそうな笑い方だ。

「それ、強制ですか」

「うーん、まあそうね」

「…………でも、僕は先生には名字に先生をつける呼び方って決めてるんで」

コナンが言い終わると同時に、四時間目開始のチャイムが学校に響いた。チャイムが鳴り終わると優果が口を開く。

「あら、そつなの」

それは残念だわ、と囁き、優果は唇を妖艶に歪ませながらさらにコナンに近づいてきた。

「なにするんですか」

「やだ、もうコナンたら。わかってるくせに」

「すみませんが、教師と教え子の関係を外れるような行為は犯罪ですよ」

コナンは優果を睨みつけながら脅す。

「あなたのよくまわる口、塞いであげるわ」

優果はコナンの肩を掴むと、唇を寄せてきた。

「私、四時間目は授業ないの。だから、ゆっくり楽しみま」

優果の声が途中で途切れる。コナンは優果が気絶したことを確認すると、腕の構えを解いた。優果はコナンに覆い被さるようにして寝ている。

「バーカ。昨日あんな紙渡されて、なんにも用意なしで図書室に乗り込んでくるわけねーだろ」

コナンは、時計型麻醉銃の蓋をパタンと閉じた。

「えーっと、あとはコイツが歩美を脅した証拠をみつけねえとな。やっぱケータイを見るのが一番」

コナンは優果のスカートのポケットからケータイを抜き出す。

「えーっと、ロックかかっているよ……。まいったな。なんて入力すればいいんだ？」

「その必要はないわ」

「うわ!?!」

コナンが人の声に驚いて図書室の入り口を振り向くと、哀が立っていた。

「なんだ、灰原かよ。脅かすなよな」

「悪かったわね」

コナンは哀が手に見慣れぬケータイを持っているのに気がついた。

「それは？」

「ああ、このケータイ？ これは、優果の共犯者のものよ」

「共犯者？」

不思議そうに哀の言った言葉を反復するコナンに、哀は持っていたケータイを渡した。

「大竹唯。彼女も、優果と組んで歩美を脅そうとしてたみたい。未遂だったけどね」

コナンがケータイのメールボックスを開くと、そこには優果と唯の計画の内容が書かれていた。

「こいつら、俺たちを脅そうとしてたのか」

「そう。まあ正確に言えば私と歩美の二人だけだね」哀は大仰に肩をすくめてみせた。「この二人、江戸川君のことが好きだったのよ。で、江戸川君にもっとも近い女子を消そうとした」

コナンがうつと顔を引きつらせる。女という生き物は恐ろしい。

コナンの表情を見ると、哀は首を不思議そうに傾げた。

「まあ消すって言っても、組織がやるような消すではなくて、気を病ませて学校を休ませるみたいなものだったらしいけど」

コナンの顔の引きつりを勘違いしたのか、哀が訂正する。

「ちなみに、唯も麻醉銃で眠らせといたわ。まあ、さすがに三階にある図書室までは運んでこれなかったから、二階の階段のところに置いておいたけど」

言いながら図書室のドアの入り口付近を指す。

「ということでは、この証拠をもって職員室に行きましょう？」

「そうだな」

コナンと哀は二階の階段に置かれていた唯と麻醉銃で眠らされた優果を置いて、職員室に向かった。

・
・
・

「と、いうわけで、優果は退職になると思つ。唯は自分宅謹慎か退学か　どっちかな」

コナンと哀、元太は、学校が終わった後三人で歩美の家に行った。歩美に、今日優果の悪事を暴いたことを伝えて安心させるためだ。

「そうなんだ。ありがと、コナン君、哀！」

少々気が病みがちになっていた歩美も、コナンと哀の報告を聞いてもとの明るさが戻ったようだ。

「今だから言えるけど、あの人、私を脅してきたんだよ。『私の言うことを聞かないと、小嶋元太の進学を邪魔する』とか『江戸川コナンと学校で口を利くな』とか『江戸川コナンに女子を近づけるな』とかいって」

「やっぱり彼女、江戸川君のことが好きだったのね」

哀が告げる事実には、元太は驚愕した。

「まじかよ！？ 教師が生徒好きになるってありなのか！？」

話の中心人物 江戸川コナンはハハハ、と乾いた笑いを漏らす。

すると、歩美が突然口を開いた。

「あ、ねえねえみんな、五月四日のパーティーのこと決めようよ！」

「ああ、そうね。もう二週間切ったし」

コナンと元太は、はっとした。

優果の件があって、すっかり忘れていたが、そうわれれば今日か

ら約二週間後はコナンの誕生日だった。哀とコナンの仲直り祝いも兼ねて、阿笠邸でパーティーをしようと四月のはじめごろから言っていたのだった。

「歩美、買出しとかどうする?」

哀の疑問に歩美は元気よく答えた。

「そりゃもちろん、みんなで買出し行こ!」

「じゃあ今度の休みにでも、近くの店に行きましようか」

ここで、コナンと元太から「えっ」と声があがる。

「ちょっと待ってくれ灰原、俺、サッカーの練習が……」

「おい、俺も柔道の練習が……」

「二人とも、もちろん行くわよね?」

せっかく歩美が元気になったのだ。しかも、みんなで買い物に行くのをとても楽しみにしている。コナンと元太の二人が一緒に行かないとなると、歩美はかなり落ち込むはずだ。そう考えた哀が、コナンと元太を逃すはずがなかった。

「……はい」

「も、もちろん行きます……」

コナンと元太は答えながら背に冷や汗が伝うのを感じた。

哀

の笑顔が、怖い。

「じゃ、詳しいことは私と歩美で決めるから、あなたたち二人は帰っていいわよ。後で連絡するわ」

「二人とも、ばいばい」

哀の恐怖に怯えていた二人だったが、最後の歩美の笑顔に癒されて、無事帰っていったのだった。

No. 25 解決（後書き）

みなさん、お久しぶりです。

えーっと、すみません。かなり間があきました。

作者の自分も、前に何をかいていたか忘れてしまっているところがあるので、矛盾点などあったら言うてください……。

話は変わりますが、もうすっかり冬ですね。

雪が降ってますよ（興奮）！！

雪は白くて綺麗でふわふわしてて好きです。

この小説の連載を始めたころはちょうど夏の真っ盛りで、物語の季節と実際の季節がそんなに開いていなかったんですが、気づけば小説の中の季節はまだ4～5月の間で、現実には12月です。

私は冬があまり好きではない（氷が滑るので。転ぶと痛い+周りの人の目が……）ので、コナンたちの季節が羨ましいです。あ、でも4月は花粉が……。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

次回もよろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5380u/>

永遠に.....

2011年12月10日01時52分発行